

A dense, lush bush of flowering plants, likely a species of Forsythia or similar, with a mix of bright yellow and white flowers. The leaves are green and serrated. The background is dark green foliage.

CLARITY

第一部 [下]

溪美居堂くまら

第4章 - 1

フェラリスと別れ、荘厳な学堂の脇に建つ「図書館」に案内されたホールは、林立する書架の先に細く丈高い人影を見たたん、われ知らず小走りになっていた。

「ヴィト！」

はっと上げた顔は二年前にコルのログン港で別れた時と変わらないようでもあり、重ねた学問に磨かれてさらに深みを増したようにも見えた。

ホールはヴィトが何を答えるより前にかっしりと彼を抱きしめた。

「元気だったか」

「はい、若君」

ヴィトの柔和な面差しがますますやさしくなった。

「図書館の司を拝命したと聞いた。君のおかげで、コル人は大陸でさらなる誉れを得たな」

「いいえ、わたしのもとで貴重な書物が五冊も紛失したのです。先日、学長には司を降りるべくお話をしました。コルの名に泥を塗ったことをお許してください」

「何を言う」

ホールはヴィトの目を見上げた。相変わらず、ヴィトのほうが少し背が高い。

「不可思議な事件だとフェラリス姫から伺った。それならば、誰が司であっても防げなかったことだ。たとえ責任いさぎよく司を返上したとしても、その名誉には変わりはない」

そこまで話してから、やっとホールは背後のふたりに気が回った。

「コルからわたしの護衛を務めてくれているアルドーとケルドーだ」

紹介されたふたりが兵士式の最敬礼をしたことで、ヴィトは当惑した顔になった。

「ホールさまの学友とはいえ、わたしは身分も名もない者に過ぎません。過剰な礼などなさいませんよう」

「大学の図書館の司は尊敬されるべき御方です。それに俺は、つまらん王侯貴族よりよっぽどあなたに敬礼したいですね」

ケルドーがすっぱり答えるのを聞きながら、ホールはフェルスリグの関所でのことを思い出した。スヴィーウルが妙にややこしい言い回しで吐いた言葉が、あらためて記憶の中の何かに引っかかった。

「ヴィト、“名を持たざる者”という言葉で何か思い当たることはあるか」

「ジアルデルが、一族内の魔力に劣る者を蔑んで呼んだ名だと言われています」

ヴィトは即答した。しかしホールの記憶に響いたのはそこではないらしく、すっきりしない。

「なるほど。その他には…」

「それから、他に…」

ふたりの言葉が重なった時、背後で書物がなだれる音がした。

ふり返ると、案内してくれた小太りの学生が足もとに散乱した書物を呆然と見下ろしている。ついでに書物を探そうとしただけのことが、ヴィトはもちろん、護衛ふたりに加えてホールまでが書物を拾い集める事態に至り、学生は泣き出しそうな顔になった。

「気にするな。だが、書物は慎重に扱え」

学生に声をかけ、次の書物を拾い上げたハールの手が止まった。すり切れた革の表紙を持つその本は、エアランに王位を奪われたフェルス王、ボールドリク4世について書かれた本だった。

ふと動きを止めたハールに気づいたケルドーは、目ざとくその手にある書物を見て取り、

「ボールドリク4世陛下は、どうやら“荒れ谷”からお出ましではないようですよ」

と、新たな情報を口にした。

「商人に訊いたのか」

「家へ戻ったついでに、街で噂話を仕入れてきました」

「なるほど。それでいい香りがしていたのか」

大学へたどり着くまでのことを思い出して、ハールはケルドーをからかった。

「えっ、いや、それは風呂に入ったからですよ。俺たち、香料には気を遣ってるんです。なあ、兄貴」

ぬけぬけと言うケルドーと返事もしないアルドーに、小さくなっていた学生までが吹きだした。

「それでは、あの王は他の亡者のようにあちこちふらつくことはなく、今でも“荒れ谷”の砦にこもっているわけか」

ハールの言葉に、ケルドーは首をかしげた。

「砦、とは何のことですか？」

ケルドーとアルドーは顔を見合わせ、目で訊ねるように学生を見たが、学生も首をかしげた。

話の流れを切るように、さっと立ち上がったヴィトが彼に書物をどさりと渡すが早いか、

「若君、こちらの書庫へ」

と、ハールだけをいくつかある小部屋のひとつへ招き入れた。

「どうした」

「若君もお気づきかと思いますが、フェルスとコルでは内容が異なっている伝説が多々あります。他国では知られぬ話がコルにはあるのです。なぜなのかは<グーダ>にもわからないのですが...」

窓の前に積まれた書物のあいだをくぐった外光が、薄闇の中でヴィトの瞳を琥珀色に透き通らせる。

「他国の人間にその話を洩らさぬよう、わたしも留学前に注意されました。アソルさまやタウルさまにも、父がご注意申し上げたはずです」

「だがわたしには、師は何もおっしゃらなかった。父からもアソルたちからも何も聞いてはおらぬ。本来、わたしが島から出ない身だったからだろうか」

陽光が射し込んだままなのに、ヴィトの瞳がずっと暗く深くなった気がした。

「若君が外つ国（とつくに）へ向かわれると知れば、どれほどわずかな時間しかなくても、父は申し上げ忘れはしません。若君にお伝えしなかったには意味があるのでしょうか。あるいは...」

ヴィトは言葉を切り、

「若君はお変わりになりましたね」

突然、まったく違うことを言い出した。扉の向こうを目で指し、

「彼らとはありのままに接しておられます」

そう言って、ヴィトはこの上なくやさしく微笑んだ。

「彼らだからだ。コルの者ではないから気楽なのかもしれないが。だが...」

ハールはヴィトの耳もとに口を寄せた。

「ふたりには悪いが、彼らををを出し抜いて、秘かにやりたいことがある」

その夜、フェリスを欠いた晚餐には出席せず、あてがわれている客間で護衛ふたりと食事を済ませたハールは、体調がよくないと言って早めに床に就いた。

ハールが王城の一室、すなわち王の保護下にいるあいだ、アルドーとケルドーは交替で家に帰ったり街へ情報収集に出たりしている。少しでも手薄のほうがいい。

しばらく眠りを装ったハールは水を飲むふりをして起き出し、何気なさそうに扉の向こうへ誰何（すいか）してみた。

「アルドーです。いかがなさいました」

「何でもない。夜中まですまん」

そう答えて寝台へ戻り、ハールは息をこらしてケルドーが戻るのを待った。ケルドーを軽く見るつもりはないが、何度も驚かされたほど気配のないアルドーよりはかわしやす相手と言える。中庭に通じる、床面まである大きな窓はわざと開け放っておいた。やがて、その窓から射し込む月光が澄明さを増した頃、ケルドーが戻った物音がした。ふたりが声を低めて交わす話し声がかすかに聞こえ、すぐ静かになった。アルドーが去った気配はないが、居続けているとは思えない。

ハールはそっと身を起こし、窓から入ってくる木々のそよぎに耳を澄ませた。

そのあるかなきかの音に添うように、静かに、すばやく歩を進める。窓枠に手をかけて立ち止まり、ハールは背後の気配を窺（うかが）った。扉の向こうからは何も伝わってこない。ハールは木陰の暗がりに溶け込むように外へすべり出た。

なんとか王城を抜け出したハールは大学の坂下のにぎわう街へ向かい、大きなビールの樽をそのままぶら下げている酒場を探した。看板代わりに目立つ樽が、そこをヴィトと落ち合う場所と決めた理由だった。ほとんど大学から出ないヴィトが、うるさい酒場女たちに顔を知られていないのは助かるが、入国したばかりのハール並みにこの界隈のことを知らないのには困る。

酒場の木戸を開くと、右奥のテーブルに座るヴィトが見えた。ほっとして近づこうとしたハールの行く手を、ふらりと立ち上がった手前の人影がさえぎった。

「どいてくれ」

「まあ、まあ。一緒に飲みましょう」

その声にぎょっとして、ハールは相手の顔を見上げた。

「楽しいところへご案内するのは俺の役目ですよ」

してやったりという笑顔で、ケルドーが言った。その後ろから、無言のアルドーが目礼する。

「まいったな。いつからだ」

「初めからですよ、王子。うちの王さまを出し抜けると思ったんですか？」
ぱっさり言っただけのケルドーはヴィトの座るテーブルにどっかり腰かけた。やむなくハールも、アルドーとともに同じテーブルについた。

「で、何をなさるおつもりで？ 遊べる場所ならいくらでもお連れしますよ」
ハールは苦笑いを刻んで、

「君の苦手な場所へ行くのだ」
とケルドーに言い返し、笑いを収めてヴィトの目を正面から見た。

「“死者の砦”に入りたい。助けてくれないか」

「わたしには古の猛者と戦う腕などありません。お手伝いできることがあるとは思えませんが」
「だが、十の問いかけをはね返すことはできるはずだ」

ヴィトの顔色が変わった。

「なぜ、それをご存知なのですか」

「君の家の書庫で文書を見つけた。砦には門番がいて、古今の事物について問いかけてくる。答えられなければ亡者の仲間入りだが、十の問いかけすべてに答えられた者はボールドリクと面会できる。古昔の誓いによって、彼は面会せねばならないのだ」

「ええ、彼はそう誓いを立てました。問いかけを経ずに通れるのは、彼が何よりも欲する王冠を運んできた者のみ…」

「王冠」

やっと理解できる言葉が現れたとばかり、ケルドーが口を挟んだ。

「王冠って、エアランに奪われた、あれですか」

「そうです。かつて王位に就いたシオール公家の女性が、ボールドリク3世の弟に嫁いだのが始まりでした。シオールとフェルス両家の血を引くエアランのほうが尊貴だと考える勢力が現れ、王位を継いだばかりのボールドリク4世に戦いを挑んだのです」

「へえ、そんな細かいいきさつは知りませんでした。で、エアランが勝ってボールドリク4世は殺された。その時、エアランは敵の頭に紙の王冠をかぶせ、偽の王だとあざけたろくでもない野郎だって、ばあちゃんから聞いてますが」

「ばあさんは、王に向かってそんな物言いはしなかったぞ」

アルドーがケルドーを睨んだ。しかしケルドーは兄のほうを見もせず、

「その王冠はエアランがミーラントで落としちまったんですよ」

「ええ。“龍戦争”の時、落馬した彼は底なし沼にはまってしまった。その彼を救い出したのが、居住地を“北の蛮族”に奪われ、流浪の身であった時代のイェルズの族長オルヴァンです。そして、王が取り落としたヴィンデルスピルを拾い、とっさにシルシュへ向かって投げたのがルマの族長ザガスでした」

「えっ、龍を退治したのはルマ人なんですか」

ケルドーがにぎやかな酒場でも目立つほどの大声を出したので、四人は首をすくめ、しばらく小さくなっていた。

「ドゥニアを束ねるフェルス王家としては、面目にかかわる問題です。ルマに安住の地を与える代わりに、公（おおやけ）の功績は奪った。ルマをフェルス国内に置いたのも、一種の監視かもしれませぬ」

心持ち声を低めて、ヴィトが話を再開した。

「なるほど。王子、それでターニットも、後の王もルマをそのままにしたんですよ」

船上での会話をおぼえていたらしく、ケルドーがうれしそうにハールに話しかけた。記憶力のよさに感心はしたが、ハールは答えず、口許に笑みを刻んで彼を見つめ返した。

「あっ、すいません。俺、話の邪魔をしてましたね」

アルドーがあきれたように首を振った。

「なぜアルドリドは王家とされるのか。君に訊ねたことがあったな。君はエアルフド王が決めたことだ、とだけ答えた。君がそれしか答えられないのなら、それが正しいのだろう」

ヴィトは控えめに次の言葉を待った。

「ではエルナのことはどうなるのだろう。わたしはずっと疑問だった。エルナが本当にフェルス王妹ならば、アルドリドにはフェルス王家ゆかりの血が流れていることになるはずだ」

「本当に、とは」

「その血ゆえアルドリドは王族であるというのならばわかるが、なぜそのことには触れられていないのか」

ハールは身を乗り出して声を低めた。

「コルには独特の伝承があると言ったな。だが、こちらが正しいと誰にわかる？ エルナの伝説もでたらめかもしれない」

「エルナってどなたなんです？」

我慢しきれなくなったように、ケルドーが訊ねた。

「ボールドリク4世とエアランの“王位継承戦争”の頃、フェルスから亡命してアルドリドの当主と結ばれたと言われる女性です。フェルス王の妹君であると伝わっています」

手短かに説明するヴィトにハールは手をひろげて見せた。

「フェルス人が知らない女性だ」

「いくらフェルスの人間でも、王族すべてなんてわかりませんよ。まして160年も前の話…」

あわてて手を振るケルドーの言葉をさえぎって、

「それを知ってどうなさるのです」

アルドーがぼそりと訊ねた。常に核心だけを突いてくる、とハールは小さく笑い、

「ただの興味だった。昔から不思議だったし、外つ国へ渡ってみて、実際にいくつか違いを感じてもいたからな。だが、さすがに亡者の群れの中へ行く気はなかった。もし、ボールドリクの亡霊も他の者のように身近に現れるようになったのなら、出会いついでに訊ねてみたくはあったが」

ハールは言葉を切って三人の顔を見渡した。

「だが、わたしはボールドリク4世の幻影を見た。王城の客間からだ」

「それは…」

全員の顔に緊張が走った。

「フェルスリグは”護られた都”です。まして、うちの王さまの城に亡霊が入れるはずがない…」ケルドーの言葉に頷き、

「あえて見せられたということだ、卓越した“夢使い”どのにな」

と言ったとたん、あの夜のように亡者が集う荒れ野を近々と感じ、自分の声が遠くぼやけた。

「行かねばならぬらしい。レギン王に命じられるためばかりではない。わたしの中でも、行かねばならぬという声がある…。それすらも、王のささやきかもしれないが」

酒場を出てみると、いつのまにかケルドーの姿がなかった。ハールの怪訝な顔つきにもかまわず、アルドーは暗がりを選んで歩を進めていく。あやしげな宿屋の角を曲がったあたりでケルドーが追いついてきて、ハールは内心ほっとした。

レギンの意向が働いていることは疑わないが、それは表立った命令でも依頼でもない。他人がハールの思い違いや嘘だとして、勝手な行動をやめさせようと介入してくる可能性は大いにあった。それが護衛ふたりでないと言い切ることもむずかしい。

「どこへ行っていた」

思わず咎めだてするような口調になったが、

「いいものをお持ちしたんですよ」

と答えたケルドーはどこか笑いをこらえているような風情で、まったく気にしているようすはなかった。

「おわかりだと思いますが、もしうちの王さまにそのつもりがあれば、お城で亡霊話を持ち出して、亡者と戦う軍隊付きで王子を送り出すこともできるはずですよ。そうじゃないってことは、王子が何をしようと王さまは関係ない。少なくとも、表立っては関知しないってことです」
女たちの嬌声が洩れる窓を隠すように植えられた並木の脇で、ケルドーは抱えてきた荷物を解きながら言った。

「つまり、都の関所も上手くやらないと出してもらえないことになります。王さまからの通行許可証があるわけじゃないですからね」

「われわれの経験です」

アルドーが口を添えた。レギン王から個人的に夢で指令される“夢の護り手”は隠密行動が多いという。「こっそり王さまにこき使われる」と言っていたケルドーの言葉をハールは思い出した。

「というわけで、こちらです」

ハールの前にぱっとひろげられたのは、夜目にも華やかな女性のドレスだった。もはやケルドーは満面の笑みを浮かべている。

「知り合いに借りてきました。王子、そして図書司どの、お召し替えを願います」

「なんだと」

おそらくかつて一度も出したことのない声でハールは叫んだが、

「しーっ。俺たちは関所番とも知り合いだし、そもそも正体を隠さなきゃならんのは王子です。王のお客が勝手に都を出るとなれば、騒ぎになりますよ。ヴィトさんだって、急に都を出るとなると目立ちます。それに2対2になってくれたほうがやりやすいんで、すいません」

ちっともすまながない笑顔でケルドーは押し返した。反論の余地はなく、しゅしゅハールとヴィトは木陰で着替えた。

「お似合いですよ」

ケルドーは楽しげに言い、愛らしいレース飾りのついたヴェールをハールの頭にかぶせた。

「おぼえてろ」

ハールはこどもじみた返事をした。派手なスカーフの陰で、ヴィトがひっそりやさしく微笑んだ

ところが、関所でのやり取りは思いのほか難航した。

「いまどき“星見の丘”へ行きたいって？ やめておけ。亡者がこの川縁まで来てるって噂を知らんのか」

熊のような番兵は腕を組んでケルドーを見下ろした。

「そうか、お前はしばらく国を出ていたな。亡者どもの勢いは激しくなる一方だ。この都には入るはずもないが、すぐ目と鼻の先まで来ていたのを数人が見てる」

「それは噂だろ。俺は東からずっと旅をして戻ったが、亡者には会ってないぜ。南で亡者に追われた商人たちが臆病風に吹かれて、そこらの木でも見間違ったのさ」

「ともかく、だめだ。責任が取れないからな」

番兵は手を振って、テーブルに置かれた酒瓶のほうへ戻ろうとした。

「頼むよ、助けてくれよ」

ケルドーが番兵に取りすがった。

「旅先の浮気がばれちゃってさ。そりゃもう、ひどい目に遭わされたんだ。もう一度、“星見の丘”で誓いを立て直せって、そう言ってきかないんだよ。だめとか言ったら殺される」

ヴェールの陰からハールがすさまじい目つきで睨んでいる。番兵にささやきかけるケルドーの半泣きの声は、ひとかけらも演技ではなかった。

「旅からは無事に戻ってるんだ。女は納得しない」

アルドーが口を添えると、番兵は怪訝そうに彼とヴィトを見た。

「弟はともかく、あんたが女連れとはめずらしいな。酒場女に入れあげるとも思えないが」

「愛を見つけたんだ」

真顔でアルドーがそう答えたので、他の三人は思わず息を詰まらせた。しかし、不思議なことにその言葉が番兵の心を動かしたらしい。

「そうか...、ずっと長いこと、恋人同士なら誰もががしてきたことだ。おかしい噂くらいで引いたら男がすたるよな」

番兵は肩をすくめ、

「行けよ。どうせ“星見の丘”までなら何ごともないさ。王子がうるさいんで言うてみただけだ」と一行に背中を向けた。

ようやく外へ出た四人は、ケルドーを先頭に川縁に沿って歩いた。

「このまま進むと小さな丘があるんです。その昔、デウィンが星を見ながら遊んだ場所と言われてて、そうやって彼らが恋の相手を探したって伝説もあるもんで、恋人同士が“星見の丘”で愛の誓いを立てるのが、ここのならわしみたひになってるんですよ」

ケルドーが説明したが、ハールはドレスの長い裾に足を取られて聞いている余裕がなかった。

「いつになったらこれを脱げるのだ」

「丘を回り込まないと、関所から見えるかもしれませぬ。今夜は明るい晩ですからね」

ハールは星の輝く夜空を仰いでため息をつき、

「これでフィニアンと追いかけてこができれば、トゥーリッドを尊敬するよ」

同じようにつまづいているヴィトに向かって苦笑いした。

トゥーリッドの名を出したことで、ハールは預かった押し花のことを思い出した。なんとなく、すぐには渡す気になれず、コルへ帰る間際にするつもりでいる。それ自体は王城の客間に置いてきてしまったが、この機会に話しておこうかと思わないでもなかった。しかし、やはり今は気が進まなかった。

丘向こうにたどり着くやドレスを脱ぎ捨て、一行は早い足どりで南へ向かった。特にハールは、いつにも増してきびきびと動いている。

朝を待って、南街道のほとりにある宿場町で食料や馬を調達し、4人はにぎわいを欠いた大きな道を進んだ。普段ならシオールの港から荷を運ぶ商人たちであふれ、活気に満ちた流通の大動脈なのだが、亡者の噂のせいで誰もが東に迂回するようになった、商売あがったりだ、と宿場の世話役も愚痴をこぼしていた。

「噂か。このあたりで亡者を見た者はいないのか」

「いませんな。“荒れ谷”あたりは昔からだが、うろうろしてる連中もクライグ平原が関の山だ。あそこで昔の戦争を蒸し返してるだけですよ」

その言葉を裏書きするように、照りつける初秋の日射しはどこかあっけらかんとして、何の気配も含んでいない。

「亡者のことより後ろを警戒したほうがいいか。事情はどうあれ、関所破りに違いはないからな」

「いや、大丈夫でしょう」

ケルドーが答えた。

「都を出られたってことは、王子のお考えは間違いなかったってことです。それなら、王さまが事を荒立てるはずありません。人知れずやって欲しいってことなんですから」

言われてみればもっともだった。

亡者の影も見えず、追っ手もなく、道連れになるような商隊も現れず、馬のひづめの音だけが響く街道の旅が続いた。

時には暑さが戻り、日盛りを木陰でやり過ごすこともある。飛び交う虫の羽音が聞こえ、ハールはコルにいるような錯覚にとらわれた。ヴィトを見ると、彼も同じことを考えていたらしく、やわらかい笑みを浮かべてハールを見つめている。くつろいだ気分は、しかし、アルドーの低く鋭い声で吹き飛んだ。

「王子、あやしげな影が見えます」

それははじめ、緑野についた小さな黒いしみのように見えた。見る間にしみはひろがり、陰鬱な灰色の一団がこちらへ向かってきているのがはっきりした。

「クライグ平原にはまだ遠いが、亡者どもの部隊のようだな」

ハールは腰に帯びた剣に手を掛けながら言った。

その袖をケルドーが引いた。

「隠れましょう、王子」

「怖じ気づいたのか」

思わずハールは言ってしまい、

「目的をお忘れですか」

横からアルドーがぴしゃりと応じた。確かに、一行の目的はボードリク4世に会うことで、亡者と戦うことではない。ハールは決まり悪げに口を閉じた。自分の人生に訪れるはずのなかった未知への旅に、どうやら平常心を失っているらしいことも恥ずかしかかったが、なによりも、もはや友と呼んでいいケルドーを謗（そし）るような口走りをしたことが恥ずかしかかった。

一行は、喬木（きょうぼく）の根かたに群れる灌木の中に身を潜めた。男四人が身を隠すには充分とはいえなかったが、気づかれずにやり過ごすだけなら何とかかなりそうだった。

灰色の小隊はその間にも近づいてくる。ハールが見る限り、長年月に彼ら自身が色褪せたような、不気味にくすんだ色合いではあったが、さほど生者と変わらない姿だった。

やがて彼らは街道にさしかかり、隊列を組んだまま次々と横切っていった。足音も、息づかいも、武具のぶつかり合う音も、衣ずれの音も聞こえなかった。大勢の人影は物音ひとつ立てぬまま遠ざかり、草原の中で不意に消えた。

「あれは何だ」

亡者が消えたあたりを見つめながら、ハールはあらためて問うた。

「あれほどの人数が通行したというのに、音もなく、地に踏み荒らされた形跡もない。あのようなものどうやって戦うのだ」

「デウィンゆかりの地、フェルスリグで鍛えた剣ならば斬れると聞きました」

ヴィトが答えた。するとケルドーが

「そりゃ思いやりと同じだって、俺たちの剣の師匠は言っていましたね」

と、わかりにくいことを言い出した。

「つまり、あの手の亡者は“思い”だけが残ってる。気力だけが残ってる。だから、気力で勝れば勝てるんだって、そんな風に師匠は言っていました。剣が効くってのは、怖がりでも気力を萎えさせないため、安心させるためにあえて言われてる嘘なんだそうです」

「それは助かった。わたしの剣はコルのものだからな」

ハールは笑い、

「コルには謎も得体の知れぬものもない。あるのは美しい空と豊かな大地、それだけだ」

と言った。ヴィトがもの言いたげな顔になったが、ハールの声音にこもった憧憬にも似た響きに押されたように口を閉じた。

いったん南へ向かった街道はウォリ山のふもとを回り込んで東へと転じ、ハールたちが使わなかったシオールの港へつながっている。

「フェルス三国に争乱をもたらすのは常にシオールだった。シオール人はそれほど気が荒いのか」

「いや、むしろ気取った連中ですね。自分らがフェルスを正すべきだ、みたいな人間が多いんですよ。エアランがイェルズを定住させたあと、王位を取り返したボールドリク5世がやつらに通商の権利を与えたのも、海運国シオールの勢いを押さえ込む気だったって話です」

「古（いにしえ）のシオールの王はフェルス王の相談役だったといわれています。時に手厳しく諫（いさ）めたり、幼王には教育を与えたこともあったようです。それゆえ、導き手のような感覚が残ったのではないのでしょうか」

「ヴァリスのほう是国内の内乱が激しすぎて、他国に干渉できなかつただけです」
めずらしくアルドーも口をはさんできたが、ひとことで終わった。

「東ヴァリスはコルに並ぶほどの豊かな穀倉地帯です。しかし西ヴァリスは“果ての砂漠”につながる荒れた土地。貧富の差が、あの国を常に不安定にしているのでしょう」

と、ヴィトが補足する。

気がかりといえば雲行きだけ、というほどのどかな旅も終わりを告げようとしていた。街道にも踏み荒らされた跡や得体の知れないがらくたが散乱していることが増えてきた。亡者の会戦の場クライグ平原が近づき、その果てには恨みを抱えるボールドリク4世の“砦”がある。さらにその南東には、デウィンのひとりであるローエが常駐して呪われたものたちを留め置いているという、大森林がある。

あたりの風景も、緑が減り、むき出しの大地に砕けた岩が転がっているような、荒れたものに変化してきた。

「亡者の戦いのために、地が荒れ果ててしまったようですね」

「物音も跡形もなく歩けるのだ、地や草木を傷つけずに戦うことはできぬのか」

コルの領主らしい怒りに、ヴィトの目がやわらいた。

「気力の爆発は恐ろしいんです。亡者はじゃまな体がないだけ、生者より破壊力がある。用心なさってくださいよ、王子」

ケルドーが焼け焦げたような岩の破片を蹴りながら言った。

空までが暗鬱（あんうつ）な色に変わってきた。雨の匂いを含んだ風が吹き始め、遠くで雷のような音が響いている。暗さは地を覆い、夜とまごうような闇が降りてきた。一行は嵐を避ける場所を探し、岩陰に身を寄せようとした。その時、空を切り裂いて稲妻が走った。

「あれは…」

雷光が照らし出した野には軍勢が集結している。ふたたび稲妻が闇を払うと、その中央には荒ぶる風に赤い髪をなびかせ、白銀を黄金で飾った鎧を身につけた女の姿が見えた。

「あの鎧はターニット、エアラン王を追い落とした“ヴァリスの女傑”ではないか」

思わずハールは叫んでいた。

自然現象なのか、亡者たちが帯びる暗黒ゆえか、雷は激しさを増して稲妻が幾筋も空を駆けめぐり、荒れ野を切れ切れに照らしている。その明かりを頼りに亡者の軍勢を確かめたヴィトが頷き、

「確かに、ターニットです。熱情の色の髪、冷酷の色の肌、白銀の鎧が敵の血で輝きを失うまで引かぬ残忍な女王、猛る戦の女神...詩に詠われるとおりの姿ですね」

と応じる声を、つんざくような落雷の音がかき消した。しかし、その雷電は天空から落ちたのではなく地を這うように横に飛んできたものだった。

「王子！隠れてください、亡者の攻撃が始まったんです」

ケルドーが叫んだ。

「見つかると厄介です。ターニットは戦いの邪魔になるものを容赦しません」

アルドーも言葉を重ねたが、書物でたどるだけの古い戦が再現されるのかと思うと惜しいような気がして、ハールは岩陰に身をひそめる気になれなかった。ヴィトも荒れ野の軍勢を見つめたまま動かない。

「あれがターニットなら、戦の相手は誰だろう。彼女が追い落としたエアランか。だが、エアランの亡霊がこの荒れ野に出るのなら、ボールドリク4世が“砦”にこもって出てこないはずはないな」

「ターニットから王位を奪い返したのはボールドリク5世ですが、彼女を殺したのは裏切り者の家臣ですから、あるいは...」

ふたたびターニットのいるあたりから飛電が閃いた。ひときわ濃い暗闇に向かって、獲物に襲いかかる蛇さながら走ったものの、何かに弾かれ、荒れ野の反対側へ飛んでねじくれた灌木を焼いた。ハールが目をこらすと、闇と見えたものは別の亡者の軍勢だとわかった。すべてが黒い装束を身につけているため、闇に溶け入ってしまうのだった。

「あれはいったい誰だ」

「黒備えはシオールの王軍です。ですが、中央には王家の旗印があるのみで誰もいません。やはりエアランではないようです」

ヴィトの言葉に続いて、

「ありゃ、シオールのケンワードですよ。エアランがターニットに攻められた時、シオール王家からの援軍として来たはいいが、エアランがさっさと逃げ出したんで総崩れになって、クライグで討ち死にした将軍です」

ケルドーが軍勢を言い当てた。

雷光の中でターニットがさっと手を挙げたのが見え、またも青白い雷電のようなものがシオールの軍勢めがけて飛んでいった。すると黒い軍団の先頭にいた男が剣をかまえた。

「あれがケンワードか。何をするつもりだ？」

ハールがつぶやくうちにもケンワードは剣を一閃させ、ターニットの雷をはじき返した。さらにターニットが手を挙げた。気性の荒い女王にしてみれば、敵への挨拶代わりなのかもしれない。ほとぼりした稲妻は今度もケンワードにはねのけられたが、今度はヴァリス軍ではなく、ハー

ルたちのほうへ飛んできた。

とっさにハールは剣を抜いて向かってくるものを受け止めた。剣がきしるような悲鳴を上げたものの、ケンワードと同じように、飛電に似たものをはじき返すことはできた。

しかし、その向かった先が悪かった。稲妻が走っていったのは、驚いたようにこちらを見たターニットのところだったのである。

ターニットはガントレットを着けた左手を開いてあっさり稲妻を止めると、同じ手を挙げて、明らかにハールたちに向かって凄絶な笑みを浮かべた。

「うわ、やべえ」

叫んだケルドーがハールの前に立ち、その前にアルドーが立った。

「どけ！」

ハールが吠え、ふたりを押しつけて前へ出た。

ターニットが飛電をくり出す前に、ケンワード率いるシオールの軍勢が喊声（かんせい）を発した。ターニットがはっとふり返る。黒い波のように動き出したシオール軍を迎え撃つべく、ターニットが正面に気を取られている隙に、4人は少し離れた別の岩陰に走り込んだ。

「無茶をなさいますな」

ヴィトがめずらしく語気を荒げた。

「とっさにしたことだ。ターニットのところへ飛ぶとは思わなかった」

「そのことではありません。なぜ、前に出ようとなさいました。わたしも、こちらのおふたりも、若君をお守りするために随（したが）っているのです。若君はコルの王位を継ぐ御方。お命を大切にさせていただかねばなりません」

ハールはケルドーとアルドーの顔に目を走らせた。ふたりとも、ヴィトに賛同する顔つきだった。

「君が来なければ、わたしは王冠を持っているふりをして過去の王に会うと言ったな」

流れ矢のように空をかすめた飛電が、深い色をたたえたハールの瞳を明るませた。

「わたしの見込みが外れれば、嘘を申し立てた罪でボールドリクに殺されるだろう、とも。それゆえ君はわたしについてきてくれた。ありがたいと思っている。そして、ふたりにも感謝している。いまここにいることそのものが、王命を越えた厚意であることはわかっている。それなのに、皆を盾にするわけにはいかぬ」

3人の抗議を抑えるようにハールは言葉を続けた。

「コルを出てから、違う運命が動き始めたようだ。わたしも運命に動かされるシュアックの駒に過ぎぬ。それゆえ、その複雑な動きを見通す方の勧めに従うことにした。そして、その方の城の庭で幻影を見た限り、ボールドリクも重要なシュアックの駒ということだ。会わねばならない」ハールはふと顔を上げた。太陽も月も星も見えない真闇の空の下でありながら、ハールはまっすぐにコル島の方角を見つめていた。

「もしもの時は、わたしの命であがなう。皆をつれてフェルスリグを出る時から心に決めていたことだ。わたしが斃（たお）れても、コルにはフィニアンがいる」

「若君！」

ヴィトが悲鳴のような声をあげた。初めて見る、冷静さを完全に取り落としたヴィトの顔を見つめながら、

「大丈夫だ。運命は変えられぬとしても、レギン王がわたしを破滅に導くとは思えない。よりよい結果のために、わたしを動かしている。わたしはそう信じている」

ハールはそう言ってほほえんだ。

やがて暗雲が切れ、嘘のような青空がひろがった。闇夜のような荒れ野にも陽光がふりそそぎ、いつのまにか、亡者の姿はかけらもない。

「やつらが姿を現すのはこの世に残した未練によるんですが、それだけなら、ただぼんやり現れたりするだけなんだそうです。こないだの小隊みたいにね。執念深いターニットたちのように、自分の意志で生前の姿を作り出すとなると、とんでもない力が必要なんで、長くはやってられないらしいんですよ」

そういうケルドーの声も、たった今まで夢でも見ていたかのようにどこかぼんやりしている。

「つまり決着に及びきれず、集まっては激突する、をくり返しているわけか。くだらぬことだ」と、ハールはあたりを見まわし、

「これならば、呪われた者たちのほうがよほど厄介だ。正体は知れぬがこの世のもので、このように消え失せることもないだろうからな」

「ですが、ご用心くださいよ。亡者の剣に斬られた傷は治らず腐っていくんです。“呪い傷”ですよ。呪いと腐敗が全身にまわって苦しみ悶えたあげく、天宮にも行けず、地をさまよう亡者の仲間入りになっちまう。フェルスで一番の名医にもどうにもならんのですから」

頷きかけて、ハールはふと湧いた疑問を口にした。

「人間はだめでも、デウィンならどうだろう。＜エイル＞ならば救えるか」

「さあ、どうでしょう。＜エイル＞がドウニアにおいでの際は、亡者がこんなに暴れたりしなかったでしょうからね」

アルドーとヴィトは最初の岩陰に置いてきた馬を連れてこようとしていたが、おびえた馬はまったくいうことをきかない。ハールとケルドーも馬のそばに戻った。

「ボールドリク4世が“砦”から出てこないのは、これが理由か」

「“砦”のある荒れ谷自体に不思議なちからがあるため消耗することがないとの説もありますが、おそらく、やはり長くは存在できないのでしょう。“砦”に閉じ込めてしまえば、彼らが姿を失っているあいだも逃れることができない。王冠欲しさに生者と関わらざるを得ないゆえの、王の戦略かと」

馬の首筋をやさしく叩きながらヴィトが答えた。

ボールドリク4世は従兄弟エアランを担ぐ勢力に敗れ、偽物の王として紙の王冠をかぶせられて遺体をさらされた。そのため、奪われた王冠を取り戻して恥を雪（すす）ぐまでは荒れ谷を去らぬと誓っている。

「王冠か。ミーラントの沼の深泥（みどろ）の底にあるものを誰が手にできよう。虚しい望みなど、棄ててしまえばよいのに」

フェルスリグのずっと南に当たるクライグは陽光が明るい。コルの空にも似たまぶしい青空のもと、ハールの言葉は戯れのように消えていった。

さいわいターニットたちとふたたび出くわすこともなく、一行は死んだ王がこもる荒れ谷に向け

て東へ東へと進んだ。あたりの景色は荒涼としていたが、ところどころには草や灌木もあり、すばしこい小さな生き物が草間を走り抜けて行ったりもした。

やがて道はゆるやかに迫り上り、いびつな木々に覆われた小さな谷間が南側に見えた。木々の作る陰翳のためだけではなく、名状しがたい暗さがたちこめている。

「あれか」

ハールは短く言い、馬首をめぐらせて道なき道に踏み込んだ。いつもなら必ず何か言うケルドーも無言でそれに続き、押し黙ったまま一行はつづら折りに下っていった。しかし、傾斜が尽きる前に馬が落ち着かなくなり、それぞれがさまざまになだめてみたものの、よくなるどころか馬を御するのがむずかしくなってきた。

「これ以上は無理らしい。放ってやろう」

やむなく荷を下ろし、手綱を放すと、馬は迷わず街道へ駆け戻っていく。馬とともに戻りたいと叫ぶ本能をハールたちは全力で抑えねばならなかった。

近づくと、荒れ谷の禍々しさが迫ってきた。ねじ曲がった木々は植物の持つやさしさを失っていて、侵入者に悪意を含んで立ちふさがり、隙あらば襲ってくるかのようなようだった。風は死に、よどんだかび臭い空気がただよっている。病んだ色合いの土がわずかに見える地面は朽ち葉で覆われ、ところどころにのぞく黄ばんだ塊は人骨らしかった。

生き物のように垂れ落ちてくる蔓をはねのけながら、ハールたちは荒れ谷へ入っていった。木立のあいだは想像以上に暗く、先頭を歩くアルドーの背中がうしろに続くハールからよく見えないほどだった。

それでも薄闇の果てに何かがぼんやり見え始めた。黒くしか見えない壁、あたりを明るませることなく燃えるたいまつ、そしてさらに深い闇をたたえた入り口が見えてきた。

「王子」

口をへの字に曲げたケルドーが目で脇を指した。一行を探るかのように、緑青色（ろくしょういろ）の鬼火が白い炎を曳きながら周囲を飛び回っている。やがてそれはずっと一行から離れ、前方の壁にぽっかり開いた入り口へ飛び込んだ。

真闇の中でくると回る鬼火の中から、ぼんやりと人影が浮かび上がってくる。絵巻物そのままのフェルスの古い宮廷服を身につけた男が、陰険なまなざしで一行を見据えた。

「ボールドリク王の“砦”はこちらか」

ハールが声をかけると、男は出来の悪い生徒にうんざりした教師のように首を振った。

「“城”と呼べ」

「承知した。ここはボールドリク王の城なのだな」

「それがどうしたというのだ。早く出て行け」

すると、ヴィトが進み出て言った。

「われわれはボールドリク王の誓約の履行を求めます」

男はぎろりとヴィトを睨みつけた。黒っぽい瞳の奥で鬼火が燃えている。

「履行を求められるのは、条件を満たした者だけだ。そなたはわしの“十の問いかけ”に答えられるのか」

「“わたし”ではなく、“われわれ”です」

ヴィトは口許にやわらかさを浮かべたまま、抜け目なく言った。男は一瞬、面白くなさそうな顔をしたが、ため息まじりに首を振った。

「よからう。ファブニル64年より前にデウインの“智恵の庫”がいずこにあったか、誰にもわからぬ」

「...そのように、人の知識には限界がある。まして開けゆく未来を誰が量れようか」

言葉を継がれた男は目を丸くしてヴィトを見た。ヴィトはにっこり笑い、

「カレヴィの『落日記』ですね。フェルスの大学の基礎を築いた彼は、不思議なことにオルムリンの暦を好んだ。彼の書物はすべてオルムリンの暦を以て書かれています」

「不思議なこと...ではないぞ。なぜカレヴィはオルムリンの暦を用いたと思う」

「それは、ひとつめの“問いかけ”ですか？」

ヴィトが鋭く切り込むと、男はあきらかに動揺した顔つきになり、ぱっと姿が波立って、輪郭がまたたくように、曖昧になったりはっきりしたりをくり返した。

「そ...、そうだな。数に入れてやろう。正しく答えられるのなら、な」

ケルドーが固唾を呑む音が聞こえた。ハールは横目で親友のようすを窺った。小首をかしげて考え込んだふうだったが、ヴィトの態度はとても落ち着いている。

「後世の学者アガトは、カレヴィの見栄だと考えたようです。彼はカレヴィが嫌いでしたからね...、デウインの暦を使えば済むところをわざわざ人に知られていない暦を使って、己が知識を誇示したのだと」

「何を言うか！ その学者はデウインの“古紀”と“中紀”の移り変わりに何の疑問も持たんのか、愚か者め！」

亡霊は激しく怒りだし、その怒りは体から噴き出す火花となって闇に散った。その前で恐れ気もなくヴィトは胸に手を当て、優雅に一礼すると、

「カレヴィはデウイン暦の正確さに疑問があった。そのため、もっとも古くから時を刻んできたオルムリンの暦を使った。これがわれわれの答えです、カレヴィどの」

静かだが、はっきりした口調で言った。

ケルドーが思わず吹き出し、目を白黒させて咳払いした。威厳と冷静さを装うカレヴィの時代があった宮廷服から、その姿が白くぼやけるほどいくつもの火花がはじける。

「ふん。よかろう。上手く切り抜けたな」

カレヴィはあごを上げ、ヴィトはつつましく目を伏せた。そうしていると、師と弟子のようにも見える。

「では、“三国戦争”のアグルはいかなる者か」

「フェルス紀元1108年、ヤムナハール128年に三国あげての戦乱に乗じ、シオールを独立させ王を僭称した領主です。その教えは、《機を見るに敏なれ》」

「ふん。オルムリン暦まで頭に入っておるか。では“三国戦争”を終結させた者はどうか」

「知られざるアルレク1世、王位を篡奪し、ヤムナハール129年に即位。その教えは、《力量は宿命に勝る》」

カレヴィが個人的な興味に負けたひとつめとは異なり、ふたりのやり取りは学問の場での問答の定型をなぞって続いていく。

「だが、《宿命は復讐する》。いかなる意味か」

「ヤムナハール265年、“シオール戦争”によりレイフ王を倒し、ボールドリク1世がシオールを再統合しました。シオールは大公の称号に甘んじます」

「ほう。そなたはクニオルよりはましな者らしいな」

カレヴィは目をそばめてヴィトを見た。本当は見下ろしたいようすだったが、いかんせんヴィトのほうが背が高い。

「クニオルのことも、もはや昔語りだろう。己が知識を誇り、我らが王の知遇を得んとてここに参った者だ。すでに教えが語られているのではないか」

心なしか、カレヴィの声がやわらいだような気がする。ハールが息をついたその時、

「クニオルがここに現れた時、彼の身を包んでいた衣服はいかなるものか」

カレヴィはあきらかに学問の問答を逸脱した問いかけを発した。ハールの顔つきに気づくと、カレヴィはにやりと笑い、

「ここは学びの場ではない。挑んだからにはいかなる問いにも答えよ」

と底意地悪い語調で言った。さしものヴィトも言葉を失い、固い表情を浮かべている。

「答えぬのか。そなたほどの者なら、クニオルの末路は知っておろう。挑み、敗れた者は生きたままその四肢を絶たれ、荒れ野に群れる山犬に投げ与えられたのだぞ」

ヴィトが苦しげにうつむいた。ハールの背を冷たい汗が伝い落ちる。ますます笑みをひろげるカレヴィに向かい、

「あのう…」

声を発したのはケルドーだった。

「うちのばあちゃんが、こんな歌を歌ってたことがあるんですが」

ケルドーは目の鬼火をたぎらせるカレヴィではなく、ふり返ったヴィトに向かい、

「愚かなクニオル、純白のローブはまがい物、赤く染まりし死出の衣、道化に似合い」

早口で歌って聞かせた。思わずカレヴィが舌打ちをして、

「そんな歌があったのか」

とつぶやいたのが聞こえ、ヴィトはゆっくりとカレヴィのほうへ向き直った。

「いま、何とおっしゃいました」

ヴィトの声に、きわめて嚴重な響きがこもった。

「学問の問答でないのはご自由です。しかし、問いかけの則（のり）は“知る由（よし）もない問いをせぬこと”です。人はなぜ生き、なぜ死ぬのか、問われて答えられる者はいない。問答は規則がなければ成り立ちません。ボードリク王の誓いも、それを踏まえたもののはず」

ハールはヴィトが心底から怒っているのを感じた。古今の学者を師としてきたヴィトにとって、師の裏切り行為は許せないものなのだろう。

「どれほど稀少なものであっても根拠があれば問えるが、問いかける者は、問われる者が知っておくべき根拠を知らぬまま問うてはならない。あなたほどの方にこれを言わねばなりませんか」
叱り飛ばされた愚かな生徒さながら、カレヴィが顔を背けるのへ、

「カレヴィどの。クニオルの衣服は、虚しくもデウィンの長を真似た純白のローブ。そして、すでに教えが語られているのではないかとの問いには、歌のみぞ残る。これが我らの答えだ。これで6つ」

ハールがびしりと言った。カレヴィはあわてたように顔を上げたが、反論はできなかった。苦いものを飲んだような表情で、カレヴィはいつのまにか現れた書物を手に次の問いを探す。

「やった、問いかけに詰まっていますよ」

ケルドーがうれしそうにささやいた。ハールも口の端に笑みを刻み、頷き返した。

「そうだな…」

面白くなさそうにカレヴィは闇を見上げ、

「ボードリク1世の剣はいずこまで及んだ」

と、どうでもよさげに問うた。あきらかに、ひと息入れるための問いかけだった。

「ヤムナハール303年、ヴァリスの一部となる“名もなき地”まで」

ヴィトもすらすらと答えた。

ところが、その答えを聞くなり、はっとカレヴィは目を見開き、まじまじとヴィトを見た。

「あの土地には名がある。ついにしくじったな、思い上がった若造め」

陰鬱な色あいのカレヴィの顔に、満面の笑みがひろがった。

青ざめたアルドーとケルドーがハールに身を寄せた。いざとなればハールを守って戦うつもりらしい。額に汗を浮かべたハールがヴィトのようすを窺うと、意外にもヴィトは落ち着いていた。カレヴィはそのようすに気づかないのか、

「あの地はファランと呼ばれていた。アストルの『失われし夢の譜』を知らぬのか。第二章三節に“灼ける地を見はるかすファランの丘”と書かれておろうが」

自慢げに言いながら、卑しいほど痛快そうな顔つきで身を乗り出してきた。時折からだから噴き上がる火花と目の奥の鬼火以外、古風な学者然としていたカレヴィだったが、生者を引き裂けそ

うな成り行きに夢中になるにつれ、あちこちの皮膚が曖昧になり、骨が透けて見えたり靄（もや）になったりして、亡者らしい様相になっている。横目で窺うハールには、ヴィトの瞳に一瞬、哀しみがよぎったように見えた。

深く息を吸うと、ヴィトは勁（つよ）く、

「先師よ、その説は覆されたのです」

と言った。カレヴィの全身からすさまじいばかりの火花が散ったが、ヴィトはかまわず続けた。

「アストルの記述には矛盾があるといわれていました。それを調べたオルバンが、アストルの書は創作を織り交ぜたものであることを突き止めた。もう100年ほど前から、『夢の譜』を典拠とすることはなくなりました。そして、正しい名前が見いだせなかったため、現在では“名もなき地”と呼ばれているのです」

「ばかな。それが、口から出まかせでない証拠がどこにある。そなたの言葉ひとつで信じるわけにはいかぬ」

わめくカレヴィをじっと見つめ、

「先師よ、学問は日に日に進みます。あなたとて、オーリンの説を覆したことがおありではないですか。己が知識にしがみついても学問は終わりです。アストルの矛盾をご存知でないはずはない。あなたほどの学者ならば、冷静にお考えになれば推し量ることができるはずです」

深い声音でヴィトは言った。ヴィトの真情は理解できるが、ハールの見るところ、カレヴィは冷静になるところか意地になっていて、説得は無駄だと思われた。ところが、

「あなたがアルフと争った“呪術師の塔”の場所も、今ではその遺構が見つかり、あなたの説が正しいことが証明されたのですよ」

とヴィトが言ったとたん、カレヴィは飛び上がった。

「なんだと！ やはりイェルズだったか。アデリスではなかったのだな」

「はい、イェルズです。アデリスではありませんでした」

ヴィトは妙にしつこく返答したが、カレヴィは気づかないようで、

「そうか、それはすでに定説になっているのか？ あの愚かなアルフの説は消え去ったのだな？」
たたみかけるように訊ねた。

「はい、先師よ。すでに定説です。大学の教本にも載っています」

「これで10だ、カレヴィどの」

ハールが断固とした口調で宣言した。

「なんだと」

カレヴィは目を丸くしてハールを見たが、その宮廷服が少し波立つようにぼやけたくらいで、火花を噴き上げはしなかった。

「暦、“三国戦争”から“シオール戦争”の歴史と教えが3つ、クニオルの衣、その教えの有無、ボールドリク1世の支配地、“呪術師の塔”の地はイェルズである、アデリスではない、そしてあなたの説が定説であること。これで10だ」

ハールがくり返すと、カレヴィはにやりと笑った。色褪せてはいたが、その顔も姿も今まででもっとも鮮明になり、人間らしく見える。

「やりおったな。まあ、よい」

そう言って、カレヴィはヴィトに目を移した。

「戦記を残すべく従軍したばかりに王の遺恨の念に縛られ、永の年月、このようなところにいた。そなたのもたらした知識は我が光明となったぞ。我らが良き後継よ、命長らえてさらに学ぶがよい」

ヴィトはつつましく目を伏せ、カレヴィの前で頭を垂れた。

一行は漆黒の闇をたたえた壁の洞に踏み込んだ。城壁のように厚いそれをくぐり抜けると、緑がかった燐光を放つ木々が並ぶ中庭のような場所に出た。ぼんやりとした木々の光がいくらか闇を明るませ、先に岩を穿った建物があるのが見て取れる。

「ありゃ本物ですね。亡者の軍勢のように消えてはくれません。閉じ込められると厄介かも…」
ハールの後ろからケルドーが言った。先頭のアルドーがふり返り、

「形あるものなら破れる。面倒な呪いがかかっているからいいのですが」

半分は弟へ、半分はハールへ向かって言った。優秀な護衛の配慮に感謝しつつ、

「用心して進もう。ヴィト、すまぬが呪物の類がないか確かめながら進んでくれ。ケルドー、言うまでもなからうが、退路を常に確保してくれ」

ハールはてきぱきと指示を出した。

ゴールドリク4世には来客を歓迎する気がないらしく、庭を横切って建物の入り口にたどり着くまで、一行を迎える者はいなかった。黒と灰色が入り交じる岩を荒く削って作られた入り口は、天然の洞窟と大差ないたたずまいである。その奥にはまた闇があった。

「暗くてようすがわかりませんね。どうなさいます、踏み込みますか」

アルドーとともに入り口を覗き込んだケルドーが問うた。その普段どおりの顔に、ハールはふと、

「君は大丈夫なのか」

と訊ねてみた。ケルドーはすぐにそれと察して、目をくるくるさせて笑い、

「俺が苦手なのは、おっかない“話”なんです。亡者に面と向かえばどうってことはありませんよ。話に聞くと、自分でいくらだっておっかなくできるでしょ？ なにしる俺、想像力にも恵まれてるもんで」

軽口を叩いた。その言葉が終わらぬうちに、ケルドーの真後ろに何かの気配が動いた。

闇が動いたように見えた。もしくは、冷たく湿った空気が意志を持ったように見えた。何かがケルドーに覆いかぶさり、彼の叫びを呑み込んだ。

「ケルドー！」

アルドーが必死の形相で弟を引きずり出した。ヴィトが駆け寄って無事を確認、ハールは皆の前に立ちふさがり、奇妙な何かに向かって剣を抜いた。

「物騒なものは収められよ、お客人」

軋るような雑音が混じった、聞き取りにくい声が応じる。

「そなたは何者だ」

「わたしは案内役にすぎぬ。名もなき者だ」

「案内の者がなぜ客人を脅す」

「その御仁がわたしの現れる場所にいただけだが」

石を引っかく音と驟雨（しゅうう）の雨音が合わさったような音が、笑い声よろしく闇に響いた。そしてぼんやりと人影に近いものが浮かび上がってきたが、カレヴィほどはっきりした形には

ならなかった。

「こちらへ」

朧（おぼろ）な光の塊になった“案内役”はいざなうように揺らぎ、真っ暗な通路をふわふわと進んでゆく。“それ”が放つ光のおかげでハールたちもわずかに周囲を窺い知れた。とはいえ、ところどころに転がる得体の知れぬもの以外は、ただ黒い石の壁が続くばかりだった。

押し黙ったまま、一行はがらんとした広間に導かれた。陰鬱な黒い壁と天井にそれでも窓が並び、陽光とも月光とも違う死んだ光が注いでいる。弱い光だが、暗さに慣れた目には明るく、あたりを窺うこともできた。

「ここでお待ちを」

軋る声言い、淡く発光する塊が消えた。

この広間もまた、岩をくり抜いて作られたものらしく、壁には削った跡が荒々しく残っている。いくらか装飾を試みたらしい形状もあったが、上手くいかなかったのか、限られた時間の中では優先することができなかったのか、中途半端に放置されていた。床も荒削りで、気をつけていないとつまづきそうな場所もある。

周囲を見まわしたハールがヴィトに話しかけようとしたその時、ぱっと目の前に黄金色の炎が燃え上がり、大きくひろがった炎の中心に、丹朱の人影が立った。それはみるみる形を整え、赤色のマントを着けた武人の姿になった。

「貴様らは何者だ」

「コルのハールと申す。ボールドリク王に...」

「コルだと。そんな国は知らぬ」

ハールの言葉をさえぎり、武人は無礼な態度で大笑した。しかしヴィトが進み出て、

「われわれは“十の問いかけ”に答えた者。王の誓いの履行を求める者。王に迎えられるべき者です」

歌うように大きく声を上げると、武人は口惜しげな顔をして炎ごとふっつりと消えた。

一瞬、広間に闇が戻った。

だが、次の瞬間、あたりは明るみ、居並ぶ亡者で満たされていた。そして紙の王冠をかぶった亡霊が現れ、憎悪に煮えたぎる目をハールに据えた。ボールドリク4世だった。

たっぴりと水を張った桶に映る空は、今日ものどかな青さだった。

書物を通し、また鷹の目を通して、この世には雲が垂れ込める空も雨や嵐もあることをイエシリーは知っている。しかし、それを我が身で味わってみることはできない。イエシリーは小さく溜息をつき、物思いも一緒に放り出すように、桶の水を花壇に撒いた。桶の青空は砕けて消えた。母のことを知って以来、イエシリーは急速におとなびた。〈エイル〉の修行を始めたことも、彼女に落ち着きを与えた原因かもしれない。数冊の書物とマニンの一般的な知識しかなくとも、ただソルーシュに言われるまま書物を暗記するよりずっとよかった。

庭の片隅に桶を置くと、イエシリーは白い陶器の水盤を持って館へ入った。鼻先でアルフの著書『失われた塔』をつついていたマニンがふり返り、

「髪を洗うのかい？」

と訊ねるのにうなづいて、イエシリーは水盤を小さな台に載せ、長く伸びた漆黒の髪をひたした。

「それが終わったら、薬草の名のおさらいをするかい？」

もう一度うなづいてから、首を軽くかたむけ、

「リフィアの髪の色は何色だったの？」

イエシリーは唐突に質問した。「母」を表す単語はどうにも使いにくく、イエシリーは母を名前で呼んでいる。

「銀ねず色だったよ。光に溶けるように輝くと、ソルーシュみたいな白銀の髪に見えたね」

「それなのに、なぜわたしは黒髪なんだろう」

イエシリーは頬をふくらませた。

「ソルーシュのような髪がよかったな。ずっと小さい頃から思ってたの。もしかしたら、わたしも大きくなったらあんな髪になるんじゃないかと思ってたんだけど」

「あいにくだったね」

マニンが軽く鼻を鳴らした時、ソルーシュが入ってきた。イエシリーはほのかに甘く薫る香油を髪にすりこんでいるところだった。本人は嫌うが、つややかな黒髪は潤みを帯びてうつくしく、みずみずしい乙女の予兆をはらんでいる。ソルーシュの表情のない顔に一瞬よぎった微妙な色合いを、マニンだけが横目で見ていた。

「武技の練習だ」

「えっ。髪を洗ったばかりなのに、嫌よ」

イエシリーはそっぽを向いた。うつくしさとともに、扱いにくさも増しているのは確かだった。ソルーシュはため息をつき、鼻に笑い皺を刻む豚をにらみつけてから、また中庭へと出て行った。

「もう、あんたにはかなわないかもしれないね」

マニンが可笑しそうに言う。言葉を返そうとして、イエシリーははっと身を固くした。意識のどこかが強く引っぱられる。

「どうしたの？」

「マニン...、ねえマニン、何かが起きたわ。フェルスのお城が...」
虚ろになった目を宙に据えて、イエシリーはとぎれとぎれに叫んだ。

イエシリーの緑の瞳は、フェルス王城のもっとも高い塔の上から中庭を見下ろしていた。王城はそれ自体が意志を持つ獣のようにうなり声をあげている。石造りの壁がふるえているのではないかと思えるほど、あわただしい気配で充満していた。

鷹の琥珀色の眼はイエシリー本人のものよりはるかに精巧だった。その眼には地にうごめく虫が映り、窓に掛けられた帳（とばり）のすき間から人間たちが駆けまわる姿も捉えている。やがて中庭にも人間が飛び出してきて、何かを叫んだり、口を引き結んだりしながらあちこちに散った。どの動きにも緊張がある。

《ヒューギン、もっと下へ。人声が聞こえるところへ降りて》

《承知》

ヒューギンはひらりと舞い、優美なテラスをそなえた部屋の脇に立つ樁の梢にとまった。出入口を兼ねた大きな窓は開け放たれ、中から尖った声が漏れ聞こえる。

「それでは、いつからコルの世継ぎはいなくなっていたのだ」

「わたしどもも存じません。ハールさまのお世話は“夢の護り手”の方々がなさると...。王命と伺いましたので、わたしどもは“夢の護り手”へのお取り次ぎだけいたしております」

「そして、それらがいっせいに逃げ散ったわけだ。いったい、どうなっているのだ」

苛立たしげな声がしたところで、鷹の眼の端を清（すが）やかな白い影が横切っていった。

「お兄さま」

庭からテラスに上がった美しい少女の姿にイエシリーは我知らず乗り出し、思わぬ筋肉を動かされた鷹は均衡を失って木から落ちかけた。

《“中”にいる時は気をつけろ》

《ごめんなさい、つい》

怒るヒューギンをなだめながら、イエシリーはあらためて少女を見つめた。白絹に金糸の刺繍が施されたすっきりしたドレスをまとい、編まずに背に垂らした髪はやや赤みがかかった金色、陽光をまとっているかのようだった。彼女は小気味よく大窓をくぐり、

「どうなさったの。なぜ客間へなど？」

奥へ向かって言葉を投げた。

「コルの世継ぎはどこへ逃げた。まさかお前も加担したのではあるまいな」

応じる男の姿は、ヒューギンの位置からは見えなかった。

「何のお話なの？」

「今朝がた、王城にいた“夢の護り手”どもが逃げた。彼らがいなくなってみると、コルの客人もまた姿がなかったのだ」

「そんなこと」

少女は髪を跳ね上げて笑った。

「“夢の護り手”のことは、お父さまにお訊きになればよろしいでしょ」

「そうはいかぬからあわてているのだ」

男は少女にぐっと近づき、おかげでその頬の削げた顔が見えた。顔色はひどく悪い。

「父上は眠っておられる。呼んでも揺すっても反応がない、呪われた眠りに陥られたのだ」と、彼は少女にささやいた。

浮島ではマニンが飛び上がり、地響きをたてて着地した。

「レギン王が、眠ってしまったって？」

「そんな大きな声を出さないで、マニン。聞こえなくなるわ」

どこかぼんやりした声でたしなめたイエシリーの目は、ヒューギンを通じてフェルス王城の客間に注がれたままである。眉間に神経質なしわを刻んでいる男はアラリク王子、そして白い服の少女はフェラリス姫だろう、とイエシリーは見当をつけた。

「お目覚めにならない、って...」

「もう何度もお起こししているのだ。侍医を呼んだところだが、どうなるものでもあるまい。何か呪いをかけていったに違いない」

「お兄さま」

フェラリスが表情をあらためた。

「それでは、お父さまの枕元からまっすぐこちらにみえたということですね。まさか、ハールさまをお疑いなのです？」

「いや、別に...」

アラリクはたじろいだように口ごもり、

「しかし、急に“夢の護り手”どもの姿が消え、コルの世継ぎもいないとなると...」

「“夢の護り手”を動かせるのはお父さまだけ。彼らと同じように消えたのなら、ハールさまもお父さまに協力なさっているのかもしれませんがわ」

フェラリスはびしゃりと言った。黙り込んだアラリクの渋面に重なって、

「人間じゃ心許ない。ヒューギンに小鳥から話を聞くように言っとくれ」

マニンの声がした。

《承知》

“中”にいるイエシリーを通じてヒューギンが直接応じ、ぐいとイエシリーの意識を引っぱって空へ舞い上がった。イエシリーはその一瞬、窓の向こうを覗き込み、フェラリスの整った顔とすみれ色の瞳に淡いあこがれを感じた。

ヒューギンは一気に塔をしのぐまで飛翔し、それからふわりと滑空して城の胸壁の上に舞い降りた。物陰に巣をかまえる小鳥たちは鷹の姿に恐慌をきたして騒いだが、並みの猛禽でないことをすぐに察し、ヒューギンを取り巻くように寄ってきた。

イエシリーは浮島に意識を向けた。小鳥の“言語”は弾けるような刺激で、ずっとひたっていると頭脳がこそばゆいような感覚に襲われる。ヒューギンが必要なことを聞き取るまでのあいだ、少し離れていたほうがよさそうだった。

水の中で目を開いたかのようにぼやけて見えた周囲が、ゆっくりと形を成していく。イエシリー

はしばらく動かず、自分の体の感覚をひとつひとつ、指先に至るまで確かめた。

「戻ってきたのかい」

「鳥の会話は疲れるのよ」

羽根の感覚が残る手先を揉みほぐしながらふり返って、イエシリーはぎょっとした。マニンの背中の中毛がちりちりと立っている。これほど緊張したマニンを見たのは、龍が争い、海から奇妙な光がひろがった、あの時以来のことだった。

「どうしたの、マニン」

「フェルス王...というより、燃える目を持つ“夢使い”が夢の中へ入って戻らないんだ。よほどのものを見たのか...よほどのことが起きたのか...」

イエシリーに答えようとしたのだろうが、マニンは半ばひとりごとのようにつぶやいている。

「マニン！」

イエシリーが強く呼ぶと、マニンは小さく黒い目でじっとイエシリーを見つめた。その目の中には、名づけられないほど不思議なものや恐ろしく古いものや謎に盈（み）ちたもの、危険なものがからまり合いながら蠢いている。

「フェルスの王がなぜ燃える目を持つか。話しておこうか」

イエシリーは意識の端を探った。ヒューギンがまだ小鳥を「尋問」しているのを確認して、イエシリーはマニンの前にぺたりと座った。

「フェルスの王統に不思議な血が混じったのは、エアルワールド王からだってことは知ってるね？フェルスでまた王位継承の小競り合いがあったのをいいことに、イエルズがアデリスを併呑し、調子に乗ってコル島にまで遠征して叩きのめされた頃、幽閉されていた塔から出て即位した王だ」

「幽閉？」

「そう。なぜまだこどもだったエアルワールドが閉じ込められてたのか、それが話の始まりだよ」マニンはあごを上げた。

「フェルスにはおかしな場所がいろいろある。デウインのひとり、ローエが見張りについている“大森林”もそうだし、死んだ王がもぐり込んだ谷間もそうだ。それほどわかりやすくなくても、時におかしなものや遭遇することはあるんだよ」

言葉を切り、マニンは足もとの『失われた塔』を蹴った。

「不思議の技を使うのはデウインばかりじゃないのさ。もっともっと昔、びっくりするような生き物たちがいた。龍もそのひとつだが...フェルスには彼らの栄えた跡がいくつも残っている。だから、王の娘アイスリンはもうちょっと、用心するべきだっただろうね」

「アイスリン？」

イエシリーは首を傾けた。

「ボールドリク5世のことはちゃんと憶えてるかい？」

「うん。ターニットの死後、フェルス王位を取り戻した人だよ。ターニット暗殺の黒幕という噂もある...」

「ああ、それはないよ。ターニットを殺したのは、こき使われて錯乱した貴族のひとりだ。あの女傑はそりゃきつい女だったらしいから」

マニンは時々、見てきたように歴史を語る。

「ボールドリク5世は忙しかった。本拠のフェルスはともかく、ターニット亡き後もヴァリスは独立状態にあったし、シオールも揺らいでいた。三国がまとまることのほうがめずらしいくらいだからね、あの国は」

「ヴァリスとまた戦争になったんだよね？」

「おや、優秀じゃないか」

小さな目をマニンはますます細めた。

「シオールには軍隊を派遣するくらいで済んだが、ヴァリスは先王であるターニットの故国だ。勢いが違う。ボールドリク5世が親征しなくてはならなかったんだよ」

「マニンが全部、歴史をさらってくれたらいいのに。書物をたどるよりずっと面白いわ」

「黙ってお聞き。そしてボールドリク5世は重傷を負った。王位と権力を取り戻したばかりの時に、病床に伏した王では困るというので、フェルスの貴族たちは王の交替を図った。ところがボールドリク5世には、王位を継げる息子がなかった」

「病んだ王、内輪もめ、三国は不安定になり、“王の中の王”不在の隙を突いて、イエルズは隣国

アデリスに攻め入った」

「フラムの『イェルズ史』だね。そう、そんなありさまだった。しかも揉めてるうちに、ボードリク5世は回復することなく天宮へ帰っちゃまったのさ。フェルスはもつれると本当にしつこいからね」

小馬鹿にするように鼻を鳴らし、マニンは話を続けた。

「とはいえ、さすがに王位を空位にはできない。エアランで懲りたんだろう、シオールやヴァリスの血が混じらない血統って理由で甥っ子のハヴォルに決まり、ばたばたと即位したんだ。そのハヴォルの娘がアイスリンなのさ」

「ふーん？」

イエシリーは不得要領な顔で生返事をした。ヴァリスから王位を取り戻したボードリク5世、そして不思議な特徴を備えたエアルワールドとの間にあって、史書でもほとんど名前しか出てこない王である。その娘に至っては名も知らなかった。秘密を明かすように名を挙げられても、ぴんとはこない。しかしマニンはぐっと大きな顔をイエシリーに寄せ、

「アイスリンは、エアルワールド王の母親だ」

と言った。イエシリーは目を丸くした。

「えっ...、でも、エアルワールドはハヴォルの子ではないの？」

「表向きはね。身を汚した娘とその子を幽閉した時点では、ハヴォルもこんなことになるろうとは思わなかったろうさ」

イエシリーは首をかしげた。そんな時の彼女はひどく幼く見える。浮島に閉じ込められたまま、高度な学問と白紙の世間智が彼女の中でせめぎ合っている。マニンは少し悲しげな目でイエシリーを見つめてから、

「アイスリンはまだ夫を迎えていなかったんだよ」

と補足した。

「ハヴォルは激怒した。王国は不安定、自分も王位を手に入れたばかりだし、非難されるようなことには敏感だったのかもしれないね。アイスリンの言い分を聞くこともなく、彼女を塔へ押し込めてしまった。まあ、殺さなかっただけよかったかもしれないが」

マニンは言葉を切り、

「王の名譽を汚した恥ずべき娘...、そうじゃないってあれほど言ったのに」

つぶやくように続けた。どう聞いても当事者の言葉である。マニンに積年の疑問をぶつけてみよう、とイエシリーは決意した。

「マニンはハヴォル王やアイスリンを知ってるの？」

「ああ」

探るような視線をイエシリーの顔に這わせ、少し考えたマニンは小さく頷き、

「あんたのお母さん、リフィアと一緒にフェルスリグにいたからね」

と明かした。イエシリーの身体がびくりと揺れた。

マニンに知らされて以来、リフィアという母がいたことをわかってはいた。だが、それは古い書物に書かれた歴史と同じ、干からびた事実でしかなかった。母が生きて在ったことが、生々しい

現実として伝わってきたのは初めてだった。

「リフィアは定住したばかりの民人を心配して、イェルズの地で〈エイル〉の技をおこなっていた。だが、フェルスの乱れにつけ込んで、イェルズはアデリスに攻め込んだ。リフィアはそれを嫌って、スニルベオルを越えてフェルスにやってきたのさ。ローエのところへ行く気だったらしい」

「ローエ... “大森林”の見張り役だといわれるデウィンね」

「ああ。なんだかお高くとまったジルニトルよりは、ローエのほうと仲がよかったね。あたしもジルニトルは好かないよ。アルバリクより不出来だね、ありゃ」

マニンは毒舌を叩き、本題に戻った。

「あたしもたまたまフェルスリグにいた。ハヴォルとは、彼が単なる公子のひとりだった頃からの知り合いでね。アイスリンのことも知ってたよ。蜂蜜のような色の髪をした、きれいな子だった」

ため息のように鼻を鳴らし、マニンは首をふった。

「あんな果樹に近づかなかったら...」

アイスリンは夢見がちな少女だった。

王家の系譜に食い込んだ、実家の力を利用するシオールやヴァリス出身の女たちに押され、フェルス貴族の娘にすぎない祖母は宮廷からも遠ざかりがちになったという。その祖母が静かな田舎の館を飾った、やわらかな幻想 — 花や愛くるしい人形、古い絵やおとぎ話、美しい詩といったもの — を、アイスリンはそのまま吸収して育った。

父ハヴォルは、現王の甥という血の近さでありながら田舎で朽ちることはできない、と思っているらしい。アイスリンを生んでから病に伏しがちな妻を母に押しつけ、都へ行ったきりだった。あきらめたような平穏の中にいるふたりの女は親しいものではあったが、さすがに幼いアイスリンには退屈に過ぎる。庭に出て鳥と語り、風を追いかけてアイスリンは育った。

庭木に抱かれて眠っていた童女は、やがて長じるにつれて野原や森に足を踏み入れた。この世ならぬ足どりで森へ向かう姫君を見た領民たちは、いかなる御方であろうかと驚きの目を剥いた。恐れる者もあったが、高貴の姫のすることを妨げる者はなかった。

妨げたのは父だった。久しぶりに母の館を訪れたハヴォルは、我が娘がおかしな噂の的であることに腹を立てた。祖母の部屋から響き渡った怒声はアイスリンをおびえさせ、いつのまにか育った娘に目をくれたハヴォルはその怯みを不快に感じた。父はアイスリンを母の病室に閉じ込めるよう命じて去り、追って都へ上らせるように手紙が届いた。ポールドリク5世の訃報とともに。旅の途中、宿泊するたびにアイスリンは王女に相応しい飾りを押しつけられ、それに埋もれた。馬車も取り替えるごとに豪華なものとなり、日に日に周囲の人垣が増えた。アイスリンはどうしてよいかわからず、馬車の奥へ閉じこもった。

都に着き、歓迎の意を表す民衆にも顔を見せなかったアイスリンは、父王の不興を買った。自身の地位が不安定であることを知っていたハヴォルは、若い姫の魅力を利用するつもりだったのである。父娘はどこまでも不幸だった。

フェルスリグの王宮に入ったアイスリンだったが、庭の草木は彼女を満たしはしなかった。高度な宝飾のように巧まれたそれは、野をさまよっていた姫の目にはまがい物にしか見えなかった。豪華な品物に囲まれながら、アイスリンは田舎の館と野山を恋うて泣いた。そしてその涙に気づいたハヴォルは娘を憎み、決して王宮から出そうとはしなかった。

ところがある日、先王妃が大学を訪ねると言い出した。都に戦火は及ばないとはいえ、戦いが重くなると大学からも人が減り、膨大な資料の管理がむずかしくなる。宮廷の女性たちで手助けをする、と言い出した女性はハヴォルにとって“宮廷での母”に当たる。さしもの王も、娘を同行させないわけにはいかなかった。

大学の最奥の庭には、古くからの植物園があった。ここを愛して都を作ったデウィンの手になるものか、それより前から存在するものか、誰にもわからなかった。

アイスリンはいつからそこに向かうようになったのか。影の薄い王女に注目していなかった貴婦人たちが気づかぬうちに、アイスリンは上手く資料室を抜け出すすべを覚えた。

アイスリンの耳には聞こえていた...不思議な古い歌が。もしくは小さなつぶやきが。

どこからか洩れるそれに王女は惹きつけられ、音をたどり、植物園の端にある、正体のわからない果樹にたどり着いた。やっと見いだしたその幹を見上げた目は、ほとんど恋する女の目だった。

白い手がそっと樹皮にふれる...と、果樹から浅い緑の実が落ちてきた。アイスリンは何も考えず、反射的にそれに歯を立てた。かりり、と固い音がして、一抹の苦さを持った甘い果汁がアイスリンの喉をすべり落ちた。

「それで...」

イエシリーは夢から覚めたような顔で促した。意識の一部はまだフェルス王宮にある。その上、マニンの術にかかって、古（いにしえ）への旅に連れ出された気分だった。

「王女のようにすがおかしいことに女官長が気づいた。侍医が調べると、身体は清いままなのにアイスリンは身ごもっていたんだよ」

マニンはため息のような鼻息をたてた。

「けれどハヴォルには、娘が不義の子を宿した、としか聞こえなかった。人気取りのために呼び寄せたものが足を掬いかねないんだから、逆上しちまったんだろうさ」

「それで、アイスリン姫は閉じ込められてしまったの」

「ああ、フェルス王宮の塔のひとつにね」

その言葉でイエシリーの意識はまたフェルスへと傾き、気がつくや鷹の鋭い眼を上げ、山容を背景にすっと立ついくつかの塔を見つめていた。鷹が視線を外したことに怖じ気づいた小鳥たちは、さえずりを止めた。

「アイスリンは泣いたの？」

遠くで自分の声が問いかけた。

「さてね」

マニンの声が聞こえた。

「時折は塔を訪ねたんだがね、アイスリンは静かに笑っていたよ。とうとうわかり合えなかった父親のことでは泣いたかもしれないが、何だろうね...」

マニンが言葉を探すと、鷹の眼で見ているにもかかわらず周囲がぼやけ、風景が落ち着かなく揺らぎはじめた。

「まるで愛する男の子を宿したかのように、そしてその子を愛してやまないかのように、すべてを愛しく受け入れたかのように、あの子は透きとおった顔をしていたんだよ」

その時、混沌とした景色のなかに一点、白い影が見えた。王宮の北にそびえる塔の窓に若い女が立っている。鷹は微動だにしていけないのに、イエシリーの視界はその女の姿でいっぱいになった。

簡素な白い長衣をまとい、丸くふくらんだ腹にそっと手を当てて、女はほのかな笑みを口許に刻んでいる。蜂蜜色の髪がやわらかく白い額にかかり、女の手も唇も髪も内側から輝くようだった。

（アイスリン...）

イエシリーの意識はかろうじてそうつぶやいた。

けれど、彼女の中にこだまするのはリフィアの名だった。

イエシリーはあたたかな羊水の中で眠っている。リフィアがやさしく触れるお腹の中で、全きおだやかさに包まれて、二度とはない時間のもとで。

「これ、どこまで行っちゃってるの！」

マニンの叱声が響き、たおやかな幻影は破れた。

気がつくのと、イエシリーは繻子のクッションの上に倒れていた。

「まったく。心をすべり込ませている時は深追いしちゃだめだといつも言ってるだろう」

不機嫌に鼻を鳴らすマニンの顔が真上にあった。

「術の中にいる時は感応しやすくなってる。あんたは制御が上手くない上に、動物だけじゃなく、物にも草木にも入り込めるんだからね。ふっと入り込んで、数千年、数万年の記憶を追ったりしたら、心が破れるか、道に迷って戻れなくなっちゃうよ」

「うん...ごめんね」

この世で暮らした時間を取り落としたかのように、イエシリーはゆっくりとぎこちなく身動きした。鷹になり、胎児になり、いきなり少女の体に戻ってきたのでは感覚が混乱するのも無理はない。

「お母さんは、フェルスリグの王宮にいたのね」

かすれた声の問いに、マニンは小さな目を見開いた。イエシリーがリフィアを「お母さん」と呼んだのは初めてだった。

「ああ。ローエのそこへ行ったり、市中で<エイル>の技をおこなっていたりしてたんだが、彼女もアイスリンのことを心配してね、しばらく王宮にいたこともあったよ。デウインはどの宮廷でも賓客扱いだからね」

やはりそうか、とイエシリーは思った。王宮の何か一石だたみや壁、庭木などが在りし日のリフィアの記憶をとどめていて、知らずにそれに触れた自分の意識に染み込み、時を超えた“夢”を紡ぐ一助になったのだろう。

「それと...アイスリンから聞いた、大学の果樹のことがあってね」

「アイスリンが果実を食べた樹のこと？」

「聞いた限りでは、どう考えてもその樹が原因だと思うだろ。それにね、あたしにはまた別の疑惑があったのさ」

「あたしらって？」

「リフィアにあたし、ローエとジルニトルもね。ヒューギンを飛ばして話し合ったよ」

いつもながら、マニンの言いかたはヒューギンを完全に下に見ているものだった。同じくりフィアの「友」とはいても、その意味はまるで異なるものらしい。

「あたしには気がかりなことがあったのさ。今では文書ひとつ残っていないが、ずいぶん昔に、ある言い伝えを聞いたことがあってね。デウインもジアルデルも未だ生まれぬ古い古い世には、自在に身を変える者たちがいて、あらゆるものの姿を取りながら暮らしていた。けれど、彼らも我らと同じく愚かな生き物で、恐ろしい戦を引き起こした...自ら根絶やしになるような戦を。それを忌み、木石に身を変えた者もある。心を眠らせ、喜びも悲しみもないものとなって生きのびた者がある...とね」

イエシリーは固唾を呑んだ。マニンはデウインすら知らないことを知っている。豚の底深さはわかっているつもりだったが、あらためて空恐ろしく感じた。

「それで…」

「ジルニトルはだめだね。文書にないものは信じられないと言ってきた」

マニンはせせら笑うように鼻を鳴らした。現在のデウィンの長も、マニンには小僧同然らしい。

「しかし、ローエとリフィアは信じたよ。特にローエは“大森林”のおかしな生き物を抑えている立場だからね。塔に閉じこもって、干からびた知識を弄んでいる者とは違った」

ジルニトルを批判するマニンの口調には、何か別のものが含まれているようだった。イエシリーはやっとそれらしい感覚が戻ってきた身体がみょうに重く感じた。しかしマニンは口調を戻し、「めずらしくローエもフェルスリグに来ると言い出したんでね、ハヴォルに話を通して、あたしらで大学へようすを見に行くことにしたのさ」

と、百年前の話を続けた。

「ところがね、ハヴォルに話をしたのがまずかった。アイスリンの言葉はまるで信じなかったハヴォルも、名だたる魔法使いがふたりも来るというんで、ようやく果樹をあやしむ気になったらしい。だからってねえ」

マニンはため息のように鼻を鳴らした。

「公子の頃のハヴォルは王位を望んで必死だったけど、あんなにわからずやではなかったよ。おまけに、あたしの言葉を黙って聞いといて、こちらには断りなしで動くような人間になっちまうなんて」

「どうしたの？」

「王は兵士を派遣して植物園の果樹を伐らせたんだ。大学の長が骨のある人間なら、あるいは止めたかもしれない。大学は“王の力及ばぬところ”だからね。だが、大学は抵抗しなかった。兵士たちは植物園に入り…どの木なんかわかるもんか、やみくもに伐って、貴重な植物園の大半をだめにしてしまったんだ」

「そんな…、デウィンが住んだ頃より古い時代のものかも知れなかったんでしょ？」

「ああ。そしてとりわけ、あたしらが暗澹（あんたん）としたのは…いくつかの木は悲鳴のような音を立てて倒れたというんだよ」

マニンは暗い目を伏せた。

「血のような樹液が飛んだと聞く。考えてもごらん、それは戦を避けた大昔の何者かだったのかもしれないんだよ。どんな者たちだったか、もはや知りようもないが、あたしたちと同じく血を流す者だったんだろうさ。それを無残に伐ってしまったとは…」

「……」

「ハヴォルは恐ろしくなったんだろう、アイスリンを王宮から出して山上の塔に移した。まあ、あたしとリフィアにしてみれば、愚かな王から守ってやりやすくなったんだがね」

ついフェルスリグの背後にそびえる山を見たくなくて、イエシリーはあわてて自分を抑えた。心をすべり込ませる技はあまり使うと戻れなくなるし、受け入れるヒューギンの負担も考えねばならない。

「ハヴォルの愚行のおかげで、アイスリンが接した果樹の正体はわからなくなった。そう考えていたのさ、あたしらも。けれど、生まれてきた子がすべてを証していた。今の世にはあり得ない

燃えるような瞳を持ち、どこか古く荒ぶる面影を宿した赤児がね」
マニンの背中の中の毛があらためてちりちりとふるえた。

「初めはそれしかわからなかった。それだけでも人間たちが恐れるには充分だったけどね。だが、エアルワルドの恐ろしさはそれだけじゃなかったのさ」

「恐ろしさ？」

「ああ、恐ろしさと言っていいだろうね。アイスリンの...というより、その息子の身边に仕えた者はたいてい逃げ出したよ。姿形は他の子と同じように赤児だったが、エアルワルドの意識は急速に成長していったんだ。その方法というのがね...」

マニンはぐいと大きな顔をイエシリーに寄せ、抜け目のない小さな目でその緑の瞳を覗き込んだ。するとイエシリーは不意に現実からもぎ取られ、一瞬ののちに小暗い森の中に迷い込んでいた。

視界をさえぎるほどの大木が立ち並び、その先の苔むした倒木のほとりにひとりの男がたたずんでいる。着古した長衣はあちこちすり切れて糸が落葉をからめ、不思議な織物のように見えた。男は何かを警戒するかのように顔を上げ、あたりを窺った。柔和な顔に険しいしわが刻まれる。なぜかイエシリーは彼を知っているような気になり、はっきりと頭に浮かばないその名を呼ぼうとしていた。その時、風もないのに、男の後ろで落葉が舞い上がった。大量に巻き上げられた落葉は人のような形を成して、渦巻きながら男に襲いかかる。イエシリーは悲鳴を上げたが、発したはずの声は聞こえなかった。男はふりむきざま、開いたてのひらで落葉の奔流を受け止め、はじき返した。

「見えたかい？」

マニンの声で、はっとイエシリーは目覚めた。いつのまにか眠りに落ちていたのだった。

「エアルワルドのやりかたを真似てみたんだ。ただ、あたしはあんたの夢を調べるつもりはなかったからね、あたしの夢だけを伝えたよ。まあ、“夢使い”ほど上手くはいかないがね」

「今のは夢？ 森の中で男の人が戦っていたわ。わたしはその人を知っているつもりだったけど、全然知らない人だった」

「ああ、それはローエだよ。“大森林”で会った時のあたしの記憶が紡いだ夢だ。だから、夢の中では知り合いのような気がしたのさ」

「ローエって“大森林”に住んでいるデウィンのこと？ 彼は何と戦っていたの？」

「彼がなぜそこにいるのかは知ってるだろ。“呪われた者”と呼ばれる得体の知れない者を、森の奥深くに封じ込める役割を担ってるんだ。“呪われた者”もまた、古い古い時代の生き物じゃないかと思うよ。時に落葉の塊に至るまで、さまざまな形を取ってみせるところなんざ、そっくりだ」

早口でそこまで言うと、マニンは鼻を鳴らした。

「話が逸れたね。エアルワルドは赤児のくせに今みたいな術が使えたんだ。いや、術を使うというより、あれは太古の生き物の本能だったのかもしれないね。無邪気に人を眠りに落とし、その夢に分け入ってはさまざまなことを学んでいった」

イエシリーは唇を歪めた。いきなり夢に巻き込まれただけでも薄気味悪く落ち着かない。まして

、自分の側へ立ち入られるとしたら、耐えられないと思った。それを読み取ったように、「塔に派遣された侍女や下男たちが逃げ出したのはそのせいさ。エアルワールドも赤児だったからね、容赦も加減もない。嘘もつけず、自分の思いが一面に共鳴している“夢”を読まれるなんて...」

マニンも鼻先にたっぴりとしわを寄せた。

「まさか...」

イエシリーは驚いて大声になった。

「まさか、マニンも眠らされて夢に入られたの？」

尊大なソルーシュでさえマニンには一目置いている。それほどの力を感じさせるマニンが赤児に屈したとは思えなかった。

「あたしだけじゃない、リフィアも夢を読まれた。魔法を使う者の秘密をね」

マニンは不機嫌そうに鼻をうごめかせ、

「自慢じゃないが、あたしは長く生きていろんなものを見てきた。あたしの夢を読むってことは、文書にも残ってない歴史を知るってことだ。その上...」

さらに鼻先に深い皺を刻んで続けた。

「エアルワールドは自分の“血”の夢を見て、すでに自分の身の上をよく知っていたんだ。あたしらは自分の中に力を見つけ、名をつけて使っているに過ぎないが、彼は...呼び覚まされた、古くて荒々しい“力そのもの”だったよ。だからあたしもリフィアも、つながりを利用して逆に読み取ることはできなかった。ただ、太古のすさまじい脈動を感じただけだった」

「目に見えるものより目に見えぬもののほうが恐ろしい。形あるものは有限だが、形なきものは無限だからだ...ってこと？」

「ほ、ヨールンドの『警句』かい。あんたも大きくなったもんだ」

マニンはちらりと目を細め、それから表情をあらためて話を続けた。

「エアルワールドはあたしたちの夢から知識を得た。そして“母ならぬ母”の血筋、つまりフェルス王家のことも夢見たようだ。だから、あの子に後見人は要らなかった。すべてを夢で知ることができたんだからねえ。“少年王”と呼ばれても、摂政の話は伝わっていないだろう？」

「あ、そうね。確かに」

「アイスリンはもちろん、リフィアさえエアルワールドにはかなわなかった。コルのアルドリドを王と定めたのも...」

言いさして、マニンは唐突に言葉を切った。

「え？ コルってイエルズと戦った島のことよね。それが何？」

「何でもないよ」

マニンがまた総毛立っていることにイエシリーは気づいた。太い脚も首も、毛が逆立って頼りなく見える。

「ヒューギンのほうは終わらないのかい？」

マニンは急に話を変えた。

「ううん、こちらを待っててくれてるみたい」

細い金鎖のように自分とヒューギンをつないでいるものを強めようと、イエシリーは首にかけた小さな袋からリフィアゆずりの黄水晶を取り出した。そっと石の表面を撫でると、イエシリーの意識は水晶の音なき音を捉え、その透きとおる“空”を落下して、はるか彼方にいる鷹の瞳へと飛び込んだ。

《遅かったな》

《長い話をしたの》

ヒューギンの中に押し込まれる感覚に耐えつつ、不機嫌な鷹をなだめようとしたイエシリーに向かい、

「状況はどうなってるんだい」

これまた苛立つマニンが急かしてきた。

マニンはさまざまな術の危険さをよく心得ていて、イエシリーにも口やかましく注意を与えるのが常である。“着地”したかどうかという時に横合いから口を出すのはめずらしかった。

「いま着いたところよ」

浮島で少し虚ろな目をした少女の体が答える。唇で答えながらも、城壁の石をつかんだかぎ爪の鋭さがゆっくりと自分のものになっていく。引き裂かれる感覚の均衡を保つことが、この術のむずかしさでもあった。

《小鳥たちは何て？》

《さほどのことはわからぬ。昨日の夕暮れまでは王に変わりはなかった。夜のうちのことは、ほとんどの鳥には知りようがないゆえ》

鋼のようなつやを持つ羽根をかすかに動かしたのは、ヒューギンなのか自分なのか。イエシリーがそちらに気を取られる間に、

「王の寝室の窓辺に、代々巢をかけているカラスがいるはずだ。何か聞いてないのかい」

マニンの声が割り込んできた。少女の耳が聞いた言葉が鷹の中にいるイエシリーの中に響き、その共鳴をヒューギンが聞き取る。

《カラスだけは王の叫びを聞いた。「スローヴティンが抜かれた」と》

「何だって?!」

マニンの叫び声の大きさがイエシリーを浮島へ引き戻し、彼女自身の体に叩きつけた。

「いたた...」

頭を抱えながら起き上がったイエシリーは、マニンを見てぎょっとした。マニンは尻もちをつき、虚ろな目をしていて。常に幾重にも底がある謎をたたえたマニンの目がこれほど無力になることがあるとは、思いもよらなかった。さらに、

「なるほど。妙に智恵をつけたと思えば、このようにして外を眺めさせていたのか」
いつにも増して冷たいソルーシュの声が背後から聞こえた。

「お前たちを喚ぶことは許した。黄水晶で遊ぶことも許した。心をすべり込ませれば、お前たちからなにがしかの知識を得るだろうとは思った。だが、こんなことは許していない」
マニンの顔にさっと生気が戻った。

「そりゃ<エイル>の修行をさせるんだ、ちっとは世の中を知らないかね」

「島から出ることは許さない」

「そんな馬鹿な！」

「イエシリー本人が約束したのだ」

マニンに見つめられ、イエシリーは思わずうつむいた。

何も考えてなかった。幼さをとどめた少女は、自分が返答した言葉の重大さをやっと理解した。

こうして学んでいることは、何の役にも立たないのか。

イエシリーは唇を噛んだ。<エイル>の技は他者を癒やすものである。世間から隔離された“浮島”に居続けるとしたら、永遠にそれを活かすことはできない。

ここから出たいと、イエシリーは初めて心から思った。そう思った時には、彼女自身の約束ゆえに、出ることはかなわなくなっていたのだった。

緑の瞳に薄い水膜が張った。置き忘れられたイエシリーの感情は幼く、その表れかたはますます幼かった。それを見て取ったマニンは鼻を鳴らしてソルーシュを睨みつけた。

「こどもを騙すような真似はおよしよ。この子はまだどうしたいかわかってないんだ。自分が望む答えに釣り込むなんて、ひどいじゃないか」

「そういうお前は何をしている」

ソルーシュの端正な面差しが揺らぎ、荒々しく酷薄なもの影が重なった。

「これを使って何を嗅ぎ回っている。お前こそ、己が目的のためにこれを利用しているではないか」

「なんだって！」

「人の世で何が起ころうが、われわれには関係ない。つまらぬことに巻き込むようなら、ただではおかぬ」

マニンが怒りでふくれ上がった。

「つまらぬこととはどういうことだい。あんたはやっぱりオルムリンなんだね、龍どもはいつもそうだ。知らぬ顔をしようとした結果が“邪龍”じゃないか。自分たちも他の種族も傷つけて、まだ学ばないのかい」

獲物に飛びかかる蛇の素早さでソルーシュが動いた。しかし、それよりはるかに速く、マニンの前にイエシリーが手を広げて立った。

「マニンに何もしないで」

イエシリーの顔つきから幼さや頼りなさが消えている。純粋な怒りがそれらを灼き、瞳を緑柱石のように冴え返らせた。

「わたしはオルムリンの子なの？ きちんと答えて。あれもこれも秘密にして、ただ服従を求められるのはもう我慢できない。わたしは誰で、何をしなくてはならないの？」

未来の彼女を思わせる勁（つよ）さがソルーシュを圧した。人ならぬものの気配が去り、美しい顔をうつむけたソルーシュは小さく見えた。

「...お前はオルムリンの血を引く。我ら一族は、そこの豚が言うように他種族を無視して生きてきたわけではない。他種族の血が混濁し、時にデウインや人のような形で生まれる者もある。ましてお前は、母がデウインだからな」

イエシリーを包んでいた怒りの薄い鎧が砕けた。イエシリーはふらつき、マニンがその鼻先で彼女の腰を支えた。ソルーシュには息をつく隙ができたらしい。

「まだ、すべてを語るわけにはいかぬ。この地には数知れぬ騒動があった。そのいくつかはまだ終わっておらず、それゆえにお前はここで静かにしておくべきなのだ。運命に見つからぬように」

マニンが何か言おうとするのを押さえて、イエシリーはまっすぐ立った。

「運命に見つかった時、何も知らないこどもでありたくない。戦えるだけのことは教えて、ここで得られる知識だけでなく。この地で起きることはあなたにも、わたしにも関わってくることでしょ。知らなくてはならないわ」

もう一度、そう遠くない未来に独り立つ女の面影がイエシリーの顔に表れた。

普段は感情をいっさい映さないソルーシュの面貌に明るみが差し、同時に瞳が落ち着かなく揺れた。言おうか言うまいか、彼にしてはめずらしく逡巡しているようだった。やがて重い口を開いたソルーシュは、

「お前をこの“浮島”から出さぬことは、わたしの意志ではない。我らが王の決定だ」と言った。マニンの鼻先にしわが寄った。

「王って...オルムリンの？」

イエシリーが訊ねた。

「そうだ。王フェリドゥーンの命により、わたしはお前をここで育ててきた。“金鱗”スィン、それがわたしの本当の名だ」

「“金鱗”...たいそうな身分じゃないか」

マニンが口をはさんだ。

「フェルスで喩えるなら“大公”に当たる。しかもまだ水蛇、なにがしかの働きをしたわけでもあるまい。このあいだ鎌をかけた時にはあんたは答えなかったが、こりゃ語るに落ちたね」

嫌悪のまなざしと言ってよい目つきで、ソルーシュは豚を見下ろした。しかしマニンはまったく意に介する風もなく、

「あんたは王族なんだから。この“浮島”を包む魔法は半端じゃない。デウィンのものでもジアルデルのものでもなく、エアルワールドに似た古代の脈動を感じる...龍の強力な術だ。これほどの術を使えるのは龍王しかいない。そこに暮らす水蛇は、王子かと思ってたんだけどね？」

むしろイエシリーに語りかけるように言った。イエシリーも思わず頷いて、回答を聞くかのようにソルーシュを見上げたが、そのソルーシュの顔からは感情の残り香が消えていった。

「わたしはフェリドゥーンに仕える者の子だ」

短く答えると、

「では、お前は何者だ。今となってはデウィンも知り得ぬようなことを、つぶさに知るお前は？」

ソルーシュはマニンを見据えた。

「何をおびえていた。お前は何を知っている？ここに何をもちたらそうとしているのだ」

マニンの背中の中が、またもちりちりと逆立ちはじめた。

「あたしも“滅びた生き物”の末裔さ。エアルワールドに命を与えた者ほど古いものではないけどね」

マニンの言葉には、ソルーシュの言葉と同じほどのごまかしがある。イエシリーは少し哀しくなった。世間の家庭のことは知らなくとも、これほど謎と隠しごとに満ちた家庭が不自然であることくらい感じ取れる。

ソルーシュもまた、イエシリーとは異なる理由で豚の答えに満足することなく眉を吊り上げた。だが、その機先を制するように、

「何をもたらそうとしている、だって？あたしは黄水晶に喚ばれて来たんだよ。忘れてもらっちゃ困る」

マニンは皮肉な口調で言い、それから複雑な表情のイエシリーへ視線を移した。

「喚ばれる前、あたしはあちこちを流れ歩いていた。捕まえて晩飯にしようとする連中をからかいながらね。そして見たのさ...アイシアが前代未聞の悪意的な吹雪に見舞われ、北の蛮族がいつにない勢いでイェルズ国境を侵（おか）し、ミーラントでは沼地がざわめき、イェルズでは大公弟が別人のように変わってしまった。不吉な、暗いものがドウニアにあふれ始めている。何かが起こりようとしているんだよ」

マニンの顔からも言葉からも皮肉の色はすべて消えていた。

「世間が穏やかでないからこそ、リフィアの娘には<エイル>の技を学んで欲しかった。いくらだって必要になるからね。あたしが考えてたのはそんなとこさ」

言葉を切って、マニンは中空を見つめた。恐怖があらためて彼女を覆い、その姿にまで深い影を落とすかのようだった。

「海の色を見た時に気づくべきだったよ。スローヴティンが抜かれるとまでは思わなかった...」

「スローヴティンって何なの？」

やっと訊くことができると、イエシリーは早口で問うた。

「魔法を退けるほどの名剣さ」

思いのほかあっさりマニンは答えた。しかしイエシリーが質問を重ねる前に続いた言葉は、連

なるほどに重苦しさを増していった。

「王宮の奥深くにあると聞いていたんだがね...運命が動き出し、誰かをあの剣のもとまで導いたんだろう。あれほどの剣となれば偶然に世に出ることなどないものさ。つまり...」

部屋の中ですっと暗くなったような感じがした。

「スローヴティンでなければ収まらないような、恐ろしいことが起こる。いや、もう起こってるのかもしれないね...」

南方にある“荒れ谷”の外には、輝くばかりの日射しが満ちている。しかし谷底にある死んだ王の“城”は邪悪な木々に覆われ、ころよい外光はいっさい入ってこなかった。広間の壁と天井に穿たれた窓から射し込むのは蛍火のような不自然な光で、ひょっとするとそれは窓ではなく、生きていた時の記憶ゆえに貼りつけられた装飾かもしれなかった。

ハール一行の背後へ威圧するように現れた古（いにしえ）の宮廷人たちは、門番役のカレヴィのように自らほのかに光っていて、窓からの光と合わせると周囲がずいぶん明るんだ気がする。しかし、一行にあたりを見まわす余裕はなかった。

雑に切られ、あちこち破れた紙の王冠をかぶっていながら、ポールドリク4世の姿には何ひとつ滑稽さがなかった。削げ落ちた頬の上に煮えたぎる目の恐ろしさがすべてを凌駕している。

「わたしはコルの王子ハール、偉大なる過去の王ポールドリク4世にお目通りがかない、恐悦至極...」

「コルの王子だと？」

死んだ王は高飛車にハールの言葉をさえぎった。

「コルとは...東海に浮かぶ小島のことか。あのような場所に生まれると、言葉の意味すら知らずに育つものらしい」

背後の亡者の群れから聞き苦しい音もつれ合いながらあふれた。どうやら嘲笑のつもりらしいが、生前の姿を留めるのはむずかしいものとみえ、不完全な口許から出る音は彼らの意図とはかけ離れていた。ポールドリクもにやりと唇を歪めたものの、歯がのぞき過ぎて狼のような顔つきになっている。

「ポールドリク5世の甥、ハヴォル王の息子エアルワールド王がコルを王国と決めました」

眉も動かさずハールは言った。

「ふん、あれはハヴォルの子ではない。ハヴォルの娘が孕んだ得体の知れぬもの...わしとは関わりのないものだ」

王は呪わしい目を怒らせ、

「そのほうはフェルスリグからの使者か。それならば覚悟するがよい。温情はいっさい期待できぬぞ」

いっそう歯を剥いた。

カレヴィが怒るたびに火花を散らしたように、熱のない赤黒い火炎が王を彩る。アルドーとケルドーがハールとの間合いを詰め、ヴィトも気遣わしげにハールを見つめた。しかしハールは火炎をまとった王をまっすぐ見たまま、

「レギン王の使者と言え言えるかもしれぬが、わたしは自身の意志でこちらへ伺いました。コルが王国と定められたことについて、あなたが何かをご存知ではないかと思ったゆえです。残念ですが、今のお言葉からあなたが何もご存知ないことがわかりました。お騒がせしたことはお詫びいたします」

と言うと、丁寧に辞儀をした。

その背後からまた不快な音が起こった。

「わしの誓いを憶えておるか」

ボードリクの声がみょうにやさしさを帯びる。ふたりの護衛は剣の柄に手をかけた。

「十の問いかけに答えた者に面会するとは誓った。だが...生かして帰すとは申しておらん」
すでにして生者を引き裂く歓びと血の匂いに酔うかのごとく、亡者の王はこころよさげに言った。

「王子」

身を寄せてきたアルドーの呼びかけが聞き取れないほどのどよめきが上がった。生前と同じように居並んでいた宮廷人たちが、その留められた魂から人間らしさを取り落とし、生者の苦悶と死を求める声だった。

「喜んでやがる」

「亡者にとって人の生气は美酒...と聞きます。恐怖と苦痛によって、それをしぼり取るのだとも...」

舌打ちしながら吐き捨てたケルドーにヴィトが応えた。確かに、亡者たちの顔つきは豪華な食卓を前にした大食漢さながら、欲望に歪んだ醜いものとなっている。

「若い男は殊に生气に満ちておる。時を失った我が宮廷に、またとない気晴らしというものだ」
ボードリクの面貌からも王者らしさが消え果て、人の卑しさと骸（むくろ）の浅ましさが交錯するばかりだった。若いハールは思わず、

「時を失ったのはなにゆえか。王冠がミーラントの底なし沼に沈んだことはご存知のはず、誰が手にできましよう。返らぬものを求めるのをおやめになれば、虚しい望みなどお棄てになれば、時は動きます」

クライグ平原で風に散った言葉をくり返した。ボードリクの嘲笑が消えた。顔そのものが暗黒に沈み、亡者の宮廷人たちも口をつぐみ、不吉な沈黙が広間に降りる。

「虚しい望みの何たるかを教えてやろう。息絶えるその刹那（せつな）まで、一刻も早い死を虚しく熱望するがよい」

ぞっとするほど冷たい声が闇から響いた。ハールと護衛ふたりは一斉に剣を抜き、ヴィトを内側にしておかたまった。望みがあろうとなかろうと、血路を開くよりほかない。

「王よ、三人はわたしに従っただけだ。去らせていただけないか」

無駄と知りつつハールはなおも言い、抗議の声を上げる三人を抑えて、首にさげていた小さな吊り袋をヴィトへ差し出した。

「これを持ち帰ってくれ。フィニアンに...」

言い終える前に、青白い火花を散らす雷（いかづち）の鞭が一行を襲った。はっとふり返り、ターニットの稲妻を受けたように剣でボードリクの一撃を受け止めたはずみに、下げ紐がハールの手を離れ吊り袋が飛んだ。

それはまるで運命のように床の突起にぶつかり、中身がボードリクの足もとに転がった。反射的にそれを見下ろした死んだ王の全身に動揺が走った。

「エルナ...」

唇をまとった王の口がその名を呼んだ。ハールは目を睜り、

「やはりあなたのお身内なのか。わたしはエルナの裔（すえ）です」

と叫んだ。ボードリクの落ちくぼんだ目から邪悪な色が去り、半ば以上が骨をむき出した骸と化しつつあった身体も生前の姿を取り戻した。

ハールはすばやく王の足もとの指輪を拾った。子どもの頃、大きな鷹に奪われそうになって以来、ハールは指輪を指にはめず、首から下げていたのである。

「これは代々伝わる、領主の妻に捧げられる指輪です。エルナが身につけていたものと伝わっています」

ハールと同じように目を睜った王はぎこちなく彼と指輪を交互に見つめ、

「エルナが生きのびたとは...思いもせなんだ...」

ふるえる声で言った。

エアランが母の実家であるシオール公家を後ろ盾に挙兵したと聞いたとき、ボードリク4世はクレイグ平原で迎え撃つ決意をした。

フェルスリグが戦乱に巻き込まれたことがないのは、伝説どおりデウィンの魔法も働いているのかもしれないが、この古く美しい都に戦禍をもたらすことを王たちが避けてきたことにもよる。また、川が天然の障壁になっているとはいえ、背後を高い山脈に遮られている都は現実問題としても戦には向かなかった。

美しいが情のない女のようなこの都は、勝利者だけを受け入れる。ボードリク1世が王位を乗っ取ったアルレクを打ち破った時も、フェルスリグの民はどちらにつくこともなく復位した王を受け入れた。もしも先祖とは異なる結末を迎えたとしても、この都はエアランを受け入れ、何ごともなく続いていくだろう。

しかし、フェルスが離反したシオールをふたたび支配下に置いてから300年以上が過ぎている。ましてアデリスがおとなしい今は、こちらに不利な条件はないとボードリクは思った。それゆえ置いてゆく宮廷の女性たちに何の対策もせず、勝利を記すための学者まで伴ってクレイグに出向いたのだった。

「エアランが礼を知る人物であるなら、エルナの消息が途絶えても絶望はせなだらう。しかし...」

ボードリクは自分の頭に手をやった。よく見ると、紙の王冠は金具で打ちつけてある。その金具に指先が触れたとたん、ふたたび王の姿は恨みに揺らいだ。

「運命の前に力及ばず敗れたとしても、武人として相対した者にこの仕打ちとは。まして双方、王家に連なる者ではないか」

ケルドーが激しく頷いた。よほどエアランが嫌いらしい。

「王宮には隠れた逃げ道がいくつかある。だが、わしはエルナがそれを承知しているのか確かめておらなんだ。ここで旅人を捕らえるたびにエルナのことを訊いたが、誰も答えられぬ。哀れな妹は逃れる道を知らず、かばう者もない都で、心ない邪（よこしま）な者の手にかかったとば

かり...」

王の瘦せた指が、今度はエルナの指輪にそっと触れた。

「それでは、そなたはわしの身内というわけか。甥ならぬ甥よ」

ハールを見つめる目は暗黒でも鬼火でもなく、生前の鷹揚さとあたたかみを浮かべた薄青い瞳になっている。伝説のエルナの瞳、彼女の指輪に飾られた宝石、そしてハールの瞳とも同じ色だった。

ボールドリクはふと思いついたように、玉座めいた岩の陰からひとふりの剣を持ちだした。

「リングルドメルと呼ばれる剣だ」

差し出されたハールは、その剣の柄と鞘に鎖が巻きついているのに気づいた。鎖は虹色の光を内包するかのような不思議な色合いで、無雑作に幾重にも巻かれ、錠や留め金は見当たらなかった。

「フェルス王家に伝わる“封印の剣”、謎の剣だ。この鎖はただ巻かれているように見えるが、解くことができぬ。長きにわたり、王の証でもあった」

ボールドリクは言葉を切り、

「なぜかわしはこれを都へ置いてくる気になれなんだ。油断ゆえにエルナは守ってやれず、剣ばかり持ち出したかと思うと、忸怩（じくじ）たるものがあったわ...」

吐き出すように言った。ハールはトゥーリッドを思い浮かべながら深く頷き、何の気なしに鎖に触れた。

突然、力を失った蛇さながら鎖はずるずると剣から離れ、音を立てて床に落ちた。

ボールドリクが半ば意味を成さない言葉を発する。ハールはそれを夢のように聞き流しながら、夢のような手つきで柄に手を掛け、ゆっくりと剣を抜いた。

涼やかな音がして、薄暗い広間を照らすほど輝く刀身が現れた。

「なんとしたことだ...誰ひとり抜けなかった剣を...」

ボールドリクがようやく発した言葉が終わらないうちに、宮廷人たちのあいだからざわめきが起こった。それは広間のあちこちにひろがり、騒ぎも大きくなっていった。王は機嫌を損ね、

「何の騒ぎか！」

衝撃をとまなうほどの叱声を放った。

「幾人かが消えてしまいましたようで...」

過去の貴族たちのうち、前面にいた者があわてて答える。ボールドリクは自分の指先や足先を確かめ、

「形を失うにはまだ早いようだが...」

つぶやくように言いながら、ハールの手もとで輝く刀身に目を向けて眉をひそめた。

「リングルドメルとは、古い言葉で“謎の剣”の意と聞いておる。あるいは誰も知らぬ力を秘めておるのか...」

ハールは伯父ならぬ伯父を気遣い、剣を鞘に収めた。光を見たあとの目には広間の闇がいつそう深く見える。亡者たちはあきらかに息をついたようすで、ボールドリクさえ口調がいくぶんくつろいだ。

「そなたはいったい何者だ、甥ならぬ甥よ」

げげんな顔をしたハールに、

「リングルドメルはフェルス王の証として伝わってきたものではあるが、あの鎖を解き剣を抜いた王はおらぬ。エルナの裔（すえ）、フェルス王家の血を引いているとは申せ、いわば傍流にす

ぎぬそなたが何ゆえ剣を抜くことができたのか。そなたの生まれはいかなるものか」

ボールドリクは重ねて訊ねた。

「わたしは...」

突然、なぜかハールの脳裏にイエルズの大公弟の姿が浮かんだ。

「わたしは“名を持たざる者”と呼ばれるほどの者です」

思いつきの言葉だったが、ヴィトがはっと顔を上げ、ボールドリクや宮廷人の一部も顔を曇らせた。

「今の世では、その言葉は軽いものとなったのか」

ボールドリクがうなるように言った。

デウィンさえ「古紀」と記した古い時代にジアルデルが魔力に劣る者を呼んだという軽侮の言葉が、160年の違いでそれほど異なるとは思えない。首を傾げたハールが応じる前にヴィトが口を挟んだ。

「若君、その言葉には、フェルスリグでお話できなかった別の意味があるのです。700年ほど前、魔力の強大さのみに目がくらんだ“呪術師”たちは、魔力を欠いて生まれた者はもとより、魔力を持つはずのない人間や穏健で魔力を強化しなかったデウィンをも蔑んで“名を持たざる者”と呼びました」

「おお、そうだ」

大学の図書室で腑に落ちない思いをしたものが、いまやっとハールの中ですっきりと収まった。そしてそれと同時に、あの異様な貴公子の物言いに感じた違和感もよみがえった。

「スヴィーウルといったか、あの御仁は何故あのようなめずらしい言い回しをしたのだろう」

「昔はめずらしくはなかったのです」

ヴィトは周囲の亡霊たち、殊にボールドリク王に配慮して話しているらしい。

「“呪術師”たちの研究で知られていたのはアルフでした。彼の本を読んでいれば“名を持たざる者”という言葉も自然と記憶します。ところが、アルフとカレヴィが対立していた“塔”の位置について、アルフの誤りが証明されてしまったため彼の功績は揺らぎ、その書物は一般には読まれなくなったのです。取って代わったカレヴィは...」

ヴィトはちらりと広間の入り口へ目をやり、

「カレヴィは研究対象が多すぎて、細部への目配りに欠けるところがあります。彼の書物だけでは学びが足りないのです」

辛（から）いことを言った。

「ですから、あれがイエルズではなく他の古い国の方なら、深い学びをなさっている方だと考えたでしょう。しかし、あの国にそうした姿勢があるとは思えません」

さらに辛くなったヴィトの言葉に、ケルドーが満面の笑みを浮かべた。

「では、あの御仁はいったいどこから...」

「イエルズには気をつけるがいい」

ハールの言葉をさえぎって、ボールドリクが口を挟んだ。

「あやつらに土地を与えるとは愚かにもほどがある。“龍戦争”にも正統な王が出陣しておれば、

あやつらは今もドウニアに入れはせなんだ」

死んだ王の姿が炎のように揺らいだ。ミーラントの沼底に沈む王冠のことを思い出したのだろう。

「しかし...いずれはドウニア側へ取り込まねばならなかったのではありませんか」

ハールの問いかけを聞くや、王のまわりに立ちこめた闇がぱっとさざめいて消えた。王は、時を超えてめぐり会った愛妹の“形見”に本気で情を抱いているらしい。

「あやつらを取り込む、何ゆえか」

「イェルズは、ドウニアと北の蛮族との障壁になっています」

ふたたび王の周囲の空気がさざめく。

「障壁とな。愚かな偽りの王のために、ドウニア全体が欺かれておるとは」

「欺かれている...とは？」

問い返ししながら、ハールはヴィトの表情に目を走らせた。しかし今のところ、彼にも王が何を言いたいのかつかめないらしい。

「では、あやつらはどこから現れた？北の蛮族とアデリスのあいだに湧いて出たとでも申すのか。あやつらは北の蛮族そのものだ。蛮族同士の争いの果てに押し出され、ドウニアに食い込もうとしておった」

やや色褪せながらも、生きているかのような王の顔が皮肉に歪んだ。

言われてみればもっともなことだったが、イェルズという国があり、アデリスを併呑して大きくなり、コルの通商を請け負っているのを、生まれた時から当然としているハールたちには意外な気がした。ドウニアの外にあったイェルズの姿を深く考えてみたことはなく、「流浪の民族」という曖昧な言葉をそのまま鵜呑みにしている。

「そうなのですか。ミーラントの北西に住むと聞く“石の民”同様、ただドウニア以外の民なのかと」

「“石の民”か。あれらも利を得るに手段を選ばぬ者たちだが、ドウニアの盛衰によらず、長きにわたって西の山脈にしがみついている。むしろ我らよりも、その来し方ははっきりしておるやもしれぬ」

ゴールドリクはちらりと笑った。エアランによる度を過ぎた侮辱を受ける前には、存外親しみやすい王だったのかもしれない、とハールは思った。

「“石の民”はジアルデルとデウインの戦争にも関わらずに済んだ。“呪術師戦争”の折にスニルベオルの山脈（やまなみ）がフェルスを守ったように、西の山脈があれらの住処を古い戦から守った。しかし、北方の荒地は違う」

ハールは同意して頷いた。

深い森と峡谷で北の国アイシアと隔てられ、ドウニアの東北にひろがる荒地は古く強い種族の戦地のひとつであり、峡谷そのものが戦の爪痕とも言われる。デウインが人間を憐れんだ頃にはすでに無法地帯だったというその地で野蛮な暮らしをしている者たちは、デウインの庇護を受けて文化を保ってきたドウニアの民とは根本的に異なると誰もが思っている。

「それだけではない」

ボードリクは言葉を続けた。

「あの地には不穏な気配がある。“大森林”も古く恐ろしい気配があるが、北の荒地の剣呑さはいくぶん生々しい」

「それはどういうことでしょう」

「“呪術師”の一統は北方から現れたという言い伝えがある」

思わずハールはヴィトへ目をやった。それに気づいた亡者の王は、

「その学者も知るまい。フェルスの王家に伝わる話ゆえ、な」

と教えてふたたび小さく笑った。

「デウイン全体にひろがった熱病ではあったが、初めは北からであったと…。それが真なら、北の蛮族は“呪術師”と何らかのつながりがあるやもしれぬ」

死んだ王の言葉に、生者四人は互いの顔を見合わせた。少し変わった言い回しだと思っただけのスヴィーウルの言葉も、“呪術師”に影響されている可能性を考えると危険なものに思える。

「偽の王が位を奪うたび、言い伝えは消えてゆく。わしにしても、我が身内でなければ伝えはせなんだわ」

ボードリクはそう言うと、勝ち誇ったような目をした。

呪われた森を出て峡谷の崖を半分も登ると、南方の太陽に照らされた身体から汗が噴き出した。全員が、生きている実感に息をついた。

「平原までは戻らないほうがいいかもしれませんね」

しきりに目をしばたたきながらケルドーが言った。すでに傾きかけた、弱さを含んだ陽光ではあったが、暗さに慣れた目にはまぶしくてならない。

「じきに暗くなる。なるべくここから離れたい気はするが、ターニットと真夜中に逢い引きしたくもないな」

ハールは正直に答えた。死の匂いと亡者にはうんざりだった。

「いっそ大森林を目指してはいかがでしょう。フェルスリグからは遠くなりますが、ここからもっとも近い人心地のつきそうなところと言えば、ローエ殿のお住まいかと」

アルドーが提案する。

「ローエ殿は見ず知らずの者も受け入れてくださるのか」

「おそらくは」

短すぎるアルドーの返答を補うように、

「ローエ殿はデウィンの中でも気さくな方とされています。森番でいらっしゃるので、迷い人の面倒もよくみられるようです。頼っていけば助けていただけるでしょう」

とヴィトが口を添えた。

ハールはがらんとした街道を見渡した。西の方角は低い秋の陽に輝いているが、その光の幕の向こうに闇が湛えられているような気がした。対して東の方角は未知の場所ではあるが、生者の息吹が感じられる。《荒れ谷》で亡者に囲まれていたからこそ「気配」に敏感になっているのだろうとハールは思い、自分の勘を信じることにした。

崖の途中に置いていた荷物は無事だった。ただし、あまり遠くに逃げないことを祈った馬は影も形もない。やむを得ず、それぞれ手分けして荷物を背負ったため、そこからの道のりはひどく無口なものになった。

しばらくすると地平線をにじませる影が見え始めた。それは日が落ちきる前にはっきりと森の形になり、やがて視界をすべて埋めつくすほどの広さと深さになった。

「あの森のどこに住まっておられるのだろう。場所によっては行き着けぬのではないか」

ハールの懸念に、

「あの森の奥には“呪われた者”たちが巣くっているため、森の中は“道が結ばれている”と聞きます」

少し息を切らせたヴィトが答えた。

「道が結ばれている...どういう意味だ」

「森へ踏み込むと、いつまでも同じ場所を回り続ける羽目になるそうです。決して暗黒の術に捕らわれたのではなく、迷い人が奥まで入り込まないようローエ殿が道を円環にしておられるのです。それを、ご本人がそのように仰せなのだとか」

「じゃあ、ちょっと入ってみても大丈夫ですね」

ケルドーが面白そうに口を挟んだ。ヴィトは笑い、

「道そのものは安全なのですが、いかんせん、ローエ殿がお気づきにならないことがあるらしいのです。3日もぐるぐる歩き回っていたら、呪いでなくても倒れてしまいますよ」

と言ったあと心持ち声を低めて、

「その昔、ジルニトル殿が大森林をお訪ねになった時、5日も道に捕らわれておられたそうで...。ローエ殿の怠慢だとお怒りになったのが、おふたりの不仲の始まりという噂があったようです」

大学所蔵の古い日記に書き残されていた話を語って聞かせた。

アルドーが急に街道を外れ、森へ向かって駆け出した。

「兄貴のやつ、笑いが止まらなくなったんですよ」

後を追いながらケルドーがすっぱ抜く。顔を見合わせたハールとヴィトも早足で森へ向かった。

できることなら、日が暮れる前にローエの家へ入ってしまいたかった。

「森の中へ踏み込めぬとすれば、ローエ殿の住まいは外から見える位置にありそうなものだが」
木と木のあいだを透かし見て探したものの、それらしい建物は見当たらない。陽光はますます弱くなり、森の中の見通しが悪くなった。闇に蝕まれるにつれ、森が隠していたものが動き出したような、不穏な気配を感じる。

「街道に戻りましょう」

ヴィトが言った。街道は森から逃れるように大きく迂回し、小さな丘の陰になって見えなくなっている。森に近づくよりも、いっそその丘に隠れて夜を過ごすほうがよいと思われた。

一行は街道に沿って進み、丘の裏側に回り込んだ。するとそこには石を積んで作られたポーチがあり、少し歪んだ木の扉が填まっていた。

「ここだったようですね」

無雑作に見えて緻密で美しい色合いを成している石積みを見ながら、ヴィトがにっこり笑った。

ハールが扉を叩こうと近づいた時、いきなり扉が勢いよく開き、勢いあまって土の壁にぶつかり蝶番（ちょうつがい）が外れ、さらに古びて反り返った板が落ちた。

「おっと、なんてことだ」

土ぼこりの向こうから情けない声が上がった。“荒れ谷”の亡者たちよりさらに時代がかったローブをまとった男が飛び出してきて、せかせかと屈んで板を拾い、なんとか元どおり嵌（は）め込もうとしている。どうやらハールたちには気づいていないらしい。

「ローエ殿か」

ハールが声をかけると、男は驚いて飛び上がった。あちこちすり切れたローブから垂れた糸に落葉や草の切れ端がからまり、男は植物を育む大地を模した道化のようにも見える。

「失礼、わたしはコルのハールと申す者。もし、あなたがデウィンのローエ殿であればなら、助けていただきたくお願いに参りました」

「おお、あなたがハール王子か。風の噂で聞いていたよ」

意外にもあっさりと答えたローエは、ちょうど吹きすぎた風に丸い鼻をうごめかせた。彼の言う“風の噂”は本当に風から聞き取るのではないか、とハールは思った。

ローエは気さくに一行を招き入れた。部屋にはぐるりと木製の棚がめぐっていて、その上にはごちゃごちゃといろいろなものが載せてある。ヴィトは瓶に詰まった紫色の小さな花房に目を輝かせた。

「これは“天宮のしずく”ですね。＜エイル＞だけが使えると聞いていましたが…」

「ああ、そのとおり。わしは摘んで溜めておくだけでな、リフィアが帰ってきたら使うじゃろ」
答えながら、ローエは客人に茶をふるまおうとしたが、ポットに入れる茶葉が見当たらないようすだった。きよろきよろするたびにほつれたローブがあちこちに引っかかり、時には道具や本をはたき落とす。

「あああ、“ろうそく茸”の瓶を壊してしまった」

派手な音を立てて割れた瓶を見下ろして、ローエは先刻より情けない声を出した。見かねたアルドーがお茶の支度を代わり、ハールはやっとローエと落ち着いて向かい合った。

「このあたりも不穏になったようですね」

ハールが水を向けると、ローエはせわしなく頷いた。

「こんなところにまで戦争で死んだ者が現れるようになったし、森のようすもおかしい。年を経た立派な樹が一夜にして腐り折れたり、土が病んだりするんじゃ。“ろうそく茸”もあまり採れなくなつての…」

「“呪われた者”が森を這い出てきたとも聞きましたが」

「そこまではない」

ローエはきっぱりと言った。

「亡者がうろつくのを勘違いしとるんじゃろ。ただ、抑えるのがむずかしくなってきた。森の奥深くに封じておったものが、森の中に少しずつ…」

言いかけて、ローエは椅子からぱっと飛び上がるや扉へ走り寄った。扉は板が外れたままになっていて、深さを増す夕闇が垣間見える。

「いかん、いかん。直しておかんと大穴が開く」

ハールたちのことはまた頭から抜け落ちたらしく、ローエはひとりでぶつぶつ言いながら板を横にしたり縦にしたりしている。いくらかあきれて皆が眺めているうちに、板の木目がぴたりと合った。するとローエの手の中で板は割れ目がなくなり、外れ落ちたのが嘘のようにもとどおりの一枚板になった。

ほっとしたようすでふり返り、度肝を抜かれた四人を見たローエは思い出したようににっこり笑い、

「お茶は差し上げたかな。そうそう、干しなつめ入りの焼き菓子があつたはず…」

と言って立ち上がった拍子に近くの棚に思いきり頭をぶつけた。はずみで棚の上の秤が落ちて折れるのを、さきほどとはまた違う驚きで四人は呆然と見つめた。

幾度も落下音と何かが壊れる音、そしてローエの悲鳴がくり返されたあと、一同はやっとお茶と簡単な食事にありついた。無頓着なローエが持ち出してくるあやしげな食べ物に神経を尖らせて

いたアルドーは、殊にもくつろいだ顔になっている。

ところがほっとしたのもつかの間、扉から固いものでつつくような音が響いた。

はっと緊張したハールたちとは裏腹に、

「ほうほう、ちょっとお待ち」

ローエはのんきな返事をして、手にしたりんごの砂糖漬けを口に放り込んでから立っていった。

「知り合いですか」

「失礼だが、ローエ殿では少々心許ないな。すぐ戦える構えでいてくれ」

一行は小声ですばやくささやきかわした。脇に立ててあった箒をローブのすそに引っかけてなぎ倒しながら、ローエは無雑作に扉を開ける。しかしさいわい、何者かが暴れ込んでくることはなかった。

ローエが話している相手の姿は室内からは見えなかったが、ごくなごやかに会話が続いているようだった。全員が息をついて、ふたたびテーブルの上に注意を戻した時、

「ハール王子。フェルスリグには戻らないほうがよさそうじゃぞ」

ローエがふいに大声で言った。ハールは訝しみ、何ごとかと戸口へ出た。

ローエと向かい合っていたのは人間やデウィンではなく大鷲ほどもある大きなカラスだったが、それ以上にハールを驚かせたのは、扉の外にひろがっているのが街道と丘の裾野の光景ではなく、深い森の中の木々であることだった。

「ここは...いったい」

言葉が続かないハールを見上げ、ローエはにんまり笑った。

「大森林の中じゃよ。わしの家は森の中にある。あんたがたが入ってきた丘の扉は、よく使う出入り口じゃな」

「そういえば...昔語りに“森の賢者の扉はすべてに通じすべてをさえぎる”と、ありました...」
ハールはぼんやりした声でつぶやきながら連なる木々を見上げた。太古からあるといわれる森の木々は重々しく、意志を持つかのように見える。

「ハール王子、景色に気を取られておる時ではない。フェルスリグからの知らせじゃ」
はっと我に返ったハールだったが、

「フェラリス姫には“王のカラス”が使えるんじゃない。アラリクといったか、あの王子ではカラスを使えまい。どうしたものか、時々ハヴォルに似た子が現れるの」

呼びかけた当のローエが的の外れた話を続けた。なにごとも整理できないのが彼の癖らしい。

「それで、フェルスリグからの知らせとは？」

「おお、そうじゃった。レギン王が“覚めぬ眠り”に落ちたそうな」

「覚めぬ眠りとは...ご病気ですか、それとも何かの呪いか...敵の攻撃か、まさか術の破綻では」
驚いてたたみかけたものの、ローエはのんびりした顔つきのままだった。ハールは苛立ちのあまり我知らず眉根を寄せている。

「騒ぐことはあるまい。魔法使いは魔法に捕らわれず、夢使いは夢に食われはせぬものじゃ」
ゆっくりと吐き出された言葉には、内心の悔りをすべて吹き飛ばす響きがあった。ジアルデルや“呪術師”たちとは異なる道を選んだデウインの“賢者”の、秘めたる強さをハールは思い知った。見直す思いで背の低いローエの顔を覗き込むと、“森の賢者”は愛敬のある顔で笑い、

「レギンのことじゃ、夢に深入りしたにはわけがある。それよりもな、アラリク王子が騒ぎ立てておるようで、ハール殿にもひそかに逮捕状が出ておるらしいぞ」

「なんですって？」

「レギンが眠り込むと同時に“夢の護り手”がすべて都から消えたそうじゃ。自分が留守をすれば石頭のアラリクがどう出るか、レギンはよう知っておったんじゃない」

ローエはカラスをふり返った。カラスの両眼は深く暗い赤で、時おりきらりと輝くとレギンの燃える瞳を思わせる。

「フェラリスからはこう言ってきておる。都には戻らず、ここから北上してルマの港を目指すように、とな。ルマの族長ならば、あんたがたをコルへ帰してくれるじゃろうと」

ハールの脳裏に、笑ったり泣いたり怒ったり、めまぐるしかった男の顔が浮かんだ。

「なるほど...確かにあの御仁とのいきさつを思えば、ルマは我らを助けてくれるでしょう。しかし、なぜフェラリス姫がルマでのことをご存知なのか...」

「フェラリスではない、レギンじゃよ。レギンが娘に言いつけたんじゃない、夢でな」

ルマの後嗣問題に巻き込まれた時、レギンは初めからこの騒動を見通していたのではないかと話したことをハールは思い出した。どうやらそれは当たっていたらしい。そしてボールドリクの問いかけと敵意を突破して謎の剣を手に入れ、ローエを頼ることも見越していたのかと思うと、心強いような薄気味悪いような、複雑な感情がハールを包んだ。

見た目よりもずっと奇妙なローエの家で一夜を過ごすのは刺激的な体験だった。

ひと部屋だけしかないと思われたのに、ふと壁に通路が口を開けている。入っていくと簡素だが気持ちのいい寝室があって、寝台がふたつ並んでいる。

「それでは、王子とヴィト殿はおやすみください。我々ふたりは見張り番を」

アルドーが生真面目な声で言い出せば、さきほどまで確かに壁しかなかったところに扉が現れ、その奥にはやはりさっぱりした寝室がある。

「ローエ殿のお宅で見張りもないだろう。明日からはまた旅の身だ、今夜はゆっくり休ませていただく」

ハールは笑って言い、突然あらわれて駒を踊らせるシュアックの盤や、しばしば天井から降りてくる酒杯や果物を載せた小さな台などに面食らいつつも、若者たちはひさしぶりのやわらかく清潔な寝台でぐっすり眠った。

朝になり、皆は最初の部屋でローエとともに食事をしたが、その時には、螺旋（らせん）の柵がめぐらされたこの部屋のどこにも通路は見当たらなかった。

「不思議な術ですね」

疑問ではち切れそうな一行を代表したハールの問いかけに、

「すべてはたたみかたじゃ。祭りの時の大きな玉飾りのついた帽子も、たたみ加減でただの地味な布に見える。そういうことじゃよ」

ローエは簡単に答えて、

「見えぬようにたたんだ罫にかかっておればよいが」

と、ひとりごとを続けた。皆が首を傾げるひまもなく、せわしくテーブルを離れたローエは玄関の扉を開いた。

「おお、ハール王子、方々（かたがた）、上手くいったぞ」

呼びたてる声に一行は玄関へ向かった。ポーチのローエはげらげら笑っている。

扉の外には森がひろがっているが、昨日ハールが見たのともまた違う場所で、少しだけ開けた空間には澄んだ泉が清らかな面（おもて）を見せている。そのほとりのやわらかい草が踏みにじられて青い香りが立ちこめており、草を蹄（ひづめ）に掛けた生き物はポーチの下でもがいていた。

「ルージェと呼ばれる生き物じゃ。見た目は鹿に似ておるが頑丈でな、そのくせ毛並みは絹よりもやわらかい。それゆえ、ほとんど狩られてしもうての。今ではこの森にしかおらんらしい。これがまた、春先にはいい香りがするんじゃよ。ああ、オスだけの話じゃがな、それでメスを惹きつけて...」

「ローエ殿、そのルージェを何とされるのです？」

“森の賢者”の脱線ぶりに慣れたハールがさえぎった。

「おお、そうじゃった。これらは頑丈ゆえ、男でも騎乗できる。あまり長くは保たんがな。丘陵地帯まで早めに抜けるに越したことはない。これに乗って行くがよい」

目に見えぬ何かに足を取られているルージェのもとへ降りると、ローエはその首筋や額を撫でながら何かを小声でささやいた。ささやかれたルージェはしぶしぶ立ち上がり、他のものも立って

一行に背中を向けた。

馬よりは細身に頼りなく、乗りにくさも感じたが、敏捷さはその身体から伝わってくる。亡者が出没する地帯を駆け抜けられるならありがたい。ハールたちはしばらく乗り馴らしてからローエに別れを告げた。

「数々のお気遣い、痛み入ります」

「なに、デウインの言葉に“関わりは分かち合うもの”と言う。助けられるものが助ければいい」
ローエが手で指し示すと、その方向にだけ道が見えた。

「しばらく道をほどいておる。早く行きなされ」

平原の端に丘陵の影を認めた時、ハールたちはあらためてローエに感謝した。

ルージェは確かに見た目よりはるかに頑丈で、森からそれほど変わらないペースで一行を運んできてくれた。人間の足であればまだ半分の行程にも及ばず、あとひと晩かふた晩、亡者がうろつく平原で夜を明かす羽目になっただろう。

不安なのはローエが言っていたルージェの持久力だったが、ヴィトが騎乗した一番小さなものの足どりに乱れが出た以外なんの問題もなく、灰色の岩が切り立った段差を成す丘陵地帯にたどり着くことができた。

「どうなさいますか、王子」

崖を見上げながらアルドーが問うた。

「何をだ？」

「ルージェです。このまま乗り進めれば助かりますが...」

「無理だろう」

自分の乗る、リーダーとおぼしきルージェの首筋をやさしく叩いてハールは答えた。

「ローエ殿もあまり長くは保たぬと仰せだった。この岩山を越すのはむずかしいだろうし、住処の森に戻れぬところまで連れて行くのも哀れだ。ここで離してやろう」

一行はルージェを解き放って彼らが森の方角へ駆け去るのを見送り、それぞれ荷物を背負った。ずしりと肩に食い込む荷物とともに崖を這い上るのはつらく、せめて荷駄を運ぶ馬がいてくれたらと全員が思った。

岩が形作るいくつもの丘を乗り越えると、なだらかに下る草原が続く。いくつかの小さな森や谷を経て、海辺へ至るはずの道だった。

「村があればいいんですがね。このあたりは俺たちも不案内なもので」

あたりを見渡したケルドーが言った。

「馬も欲しいところだが、何より食料が心許ないな」

ローエはある限りの乾し肉や固パンや干した果物など保存のきく食べ物を渡してくれたが、そもそも食べることに無頓着であるらしく、豊富な量とは言いかねた。獲物がいれば狩りをするにしても、ルマまで何日かかるかわからないと思うと村落のひとつもあってもらいたいところである。

しかし、二日目に通りすぎた森で鹿を仕留め、やっとたらふく食べた翌朝、岩まじりの草原の向こうに見えた小さな点がすべてを解決した。

点はみるみる人馬の形を成し、やがて鞍上の人物は長い髪をなびかせた女であることがわかった。赤みがかった金色の髪が清浄な朝の陽光に輝く。

「フェラリス姫...？」

皆があっけにとられるうちに、凜々しい姫君は見事な手綱さばきで野営地に駆け寄ってきた。

「よかった、ハールさま」

フェラリスは心からほっとしたようすで、フェルスリグの大学で見せたよりもさらに美しい笑み

を浮かべた。

「ルマへ向かわれたけれど馬をお連れでないと聞き及びましたので、お迎えにまいりましたの」
ひらりと馬から下りた姫に当惑して、

「ご厚意は感謝いたします。しかし...」

ハールは口ごもった。フェラリスはもと来た方角をふり返り、

「まあ、1騎もついて来ていなかったのですね。情けない」

初めて気づいたように小さく叫んだ。そして、

「すぐに馬がまいります」

そう言って、少しはにかんだような表情でハールを見た。

やがて姫を追って3騎が駆けてきた。最後に食料を載せた馬車が追いつき、馭者や騎手のひとり
はアルドー兄弟と親しげに挨拶を交わした。どうやら同じ“夢の護り手”らしい。ハールが目を丸くして

「いったい、お父上の眼力はどこまで及ぶのでしょうか。ここまで行き届いたお気遣いをいただく
とは...」

と言うと、フェラリスは少し困ったような顔をしてもの言いたげなようすを見せた。ケルドー
とヴィトは顔を見合わせ、ヴィトも口を挟みたような表情になったが、

「そして、我々のために姫君みずからこのような場所にまでおいでくださったこと、深く感謝い
たします」

と言葉を続けられたフェラリスが沈黙を選ぶのを見て、彼もまた口をつぐんだ。

フェルスからの援助者たちは乗ってきた馬を一行にゆずり、空になった馬車に乗り込んだ。

「ハールさま」

フェラリスが狭い窓から首を伸ばす。

「兄はまだルマを疑っておりません。宿場などの話からシオールに向かったものと思っているよ
うです。あるいは、ずっと気づかないかもしれませんが...」

少女の花びらのような唇にほのかな笑いが浮かんだ。

「もし気づかれた時には、ルマはフェルスの属国のようなものですから、摂政王子の意向を無視
するのはむずかしいでしょう。兄が気づかぬうち、フェルスからの早馬が飛ばぬうちに...お急ぎ
ください」

「摂政...とは」

ハールが眉根を寄せた。

「ええ。父が目覚めませんので、隠しおおせるはずありませんし、兄は事実を公表して《王に
代わって政務を執る》と宣言いたしました。ドウニアは...、あの兄の裁量に任されることになっ
たのです」

それではフェルスを逃れても無駄ではないか。ただの疑いだけでなく、最初に会った時からあの
痩せた青年の目に宿っていた敵意が追ってくるのであれば、コル島に捕吏が乗り込んでこないと
も限らない。そこで抗えば国同士の問題になり、戦につながるかもしれなかった。

フェラリスはハールの頭に浮かぶ未来図を読み取り、

「いま逃れてくだされば、わたくしや重臣が諫めます。兄は...良くも悪くも強硬な支配者ではありません。戦よりは不問に付すことを選び、やがて自分の間違いに気づくでしょう」

おだやかに言った。大人びた態度に感心しながら、ハールはもう一度フェラリスに礼を言って与えられた馬にまたがった。よほど強い馬とみえて、まだ全身にみなぎる力を感じる。

「よい馬を選んでくださった、これならば兄君を出し抜けましょう」

快活な言葉を残し、ハール一行は駆け出した。岩とひねこびた雑草ばかりの草原にフェラリスはしばし馬車をとどめ、馬影がはるか彼方に溶け消えるまで見送っていた。

ハールたちの旅程は一気に楽になり、二日を経ずにルマの王宮に着いた。さいわい、フェルスからは何の知らせも届いていないらしく、一行は「世継ぎの恩人」という扱いのまま、むしろ、先日断られた祝宴に代わる宴会を開いて歓待しようとするシュブールを振り切るのにハールは苦労した。

「父の加減が悪いようで...」

心ならずも嘘をついて、一行はようやくクル港から船出することができた。わざわざ見送りに来たシュブールへ船上から頭を下げ、ほっとしたハールは胸いっぱい潮風を吸い込んだ。

「しまった」

突然叫んだハールに3人が緊張する。

「いかがなさいました」

「トゥーリッドから君に、押し花を預かってきていたんだ。王宮の客間に置いたままにしまった。トゥーリッドに山ほど文句を言われるな」

言われたヴィトを含め、全員が笑いだした。

本人を連れて帰るのだからいいだろう。ふいに乙女らしくなった妹の面影をハールは思い浮かべ、それはいつしかフェラリスの美しい笑顔と混然となっていた。